

川柳の雑記

Pensoj flugas trans la land - limon THE SENRYU ZASSHI

No. 449

麻生路郎 ☆ 主筆

十月号



和
人
の
車
No. 449

川柳雑誌社主催

文蝶追悼句会

文蝶を悼む句会を催します。故人と柳縁の深
浅をとわないで、一人でも多く出席して英霊
を慰めましょう。

日時 十月八日(木)午後六時

会場 自安寺(「211」一四七八番)

大阪市南区千日前電停東スゲ北側

兼題「英会話」(三題) 麻生路郎選

「つば」(三題) 川村好郎選

「秋の酒」(三題) 西尾 榮選

「玉串」(三題) 八木摩天郎選

席題 三題(当日発表)

句評 清水 白柳

呈賞 ☆各題天位・各題天位から路郎選により不朽洞賞

会費 百円

幹事 いさむ・文秋・甫佑・八郎・与呂志・清人

・すむ・薫風子・柳宏子・舟遊・摩天郎

★投句だけの方は郵券三十円同封

(〆切十月五日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雑誌社句会部

電・大阪 六七一局 六〇八一

11月本社句会予告

兼題
白 菊
けだもの
真珠
へんくつ

大阪文化祭第16回川柳大会

恒例による大阪文化祭の川柳大会は左の通り第十六回
を迎えるに至りました。初心者の方々も多数投句されま
すよう、おすすめてください。又どなたも出句の有無にか
かわらずご来場の程お待ちいたします。(会費不要)

主催 大阪府、大阪府教委
大阪市、大阪市教委

日時 昭和39年11月21日(土)

会場 大手前会館三階大広間

開会の辞 西尾 榮

講 演 初代 鷹治郎の話 演習評論家 大西利夫氏

兼題 「食通」 麻生路郎選

「淀川橋」 岡橋宣介選

「嫉妬」 岸本水府選

「緑」 堀口塊人選

席題二題当日発表

清興 場魔術 センジ 中村氏

川柳賞 席・兼題優秀句に大阪府知事・府教育委

員長・大阪市長・市教育委員長から文化

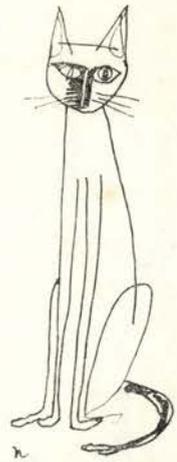
祭川柳賞を贈呈。

各題毎にはがき型句箋及び官製ハガキ一

枚に二句ずつ。裏面に住所・姓名・雅号

を明記。大阪府北區中之島、大阪府教委内

大阪文化祭川柳大会係宛(十一月十日着
限り〆切)
入選作品句集 希望者に頒布。一〇〇円(郵券可)



不朽洞句帖

麻生路郎

要するに老人扱いされただけ

台風と学者相撲にならなんだ

台風も聖火も通りゃことわれず

台風一過はあきん釘抜き持って来い

世を救うなどと今更申そうや

女だってとは劣等感のもたえ

川柳雑誌★十月号目次

不朽洞句帖	麻生路郎	(3)
川名句抄の鑑賞	麻生路郎	(4)
子規つれづれ帖	東野大八	(16)
私の作句練習	青山慶之助	(22)
統・川柳書架	現代柳人録	(19)
川傍柳初編研究(二)	丸十府・岡田甫	(19)

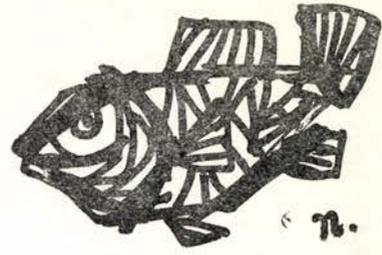
川柳にあらわれた成人病	川端柳風・高須陸三味・前田喜代人	(12)
随筆・九本の胡瓜	岡崎重義・清博美・藤井和雄	(30)
五世川柳とその句(二)	若林卓右	(19)
寸感	中村九呂平	(26)
川柳人生観	阿達義雄	(37)

柳人とスポーツ	福井野迷路・東野大八・服部十九平	(20)
	河村日満・渡辺晩童・浜田久米雄	(20)
	伊藤茶仏・西尾栗・麻生路郎	(20)

随想 二つの流れ	麻生路郎	(16)
柳志寸言	本多柳志	(22)
宝井其角	富士野鞍馬	(32)
大方川柳「薄情」発表		(41)
不朽洞の人々	柳志氏の巻	(39)

★

川柳塔	麻生路郎	(6)
同舟近詠	諸生路郎	(11)
近作柳樽	北川春郎	(22)
人生譜	河野春三	(28)
金泥集	麻生葭乃	(21)
各地柳壇		(42)
★柳界展望	不朽洞会から	(38)
「セーブルスマン」	大鶴喜由	(39)
「地」	杉谷湖山	(34)
「緑」	早川清生	(40)
★柳樽室	路郎生(46) ★飛燕往来	(40)
	編集局	(40)



川柳 名句抄の鑑賞

麻生路郎

〔九五〕

陽まわりが激しい情事知っていた

(宵明)

向日葵のムードが、激しい愛欲を象徴した抒情詩である。句が擬人法で構成されているので、情事の醜態さにペールを被せた

答だ。夫はあてがわれた晩酌一二本に陶然としている。妻はお酌に、お給仕に、あわただしい中で、自らの箸を動かしている光景は美しい。それぞれの人物の動きが眼に迫ってくる。

〔九七〕

先輩の取柄は酒がいけるだけ

(柳児)

夏はいいみんな裸の夕ご飯

(宏方)

あけっ放しの家庭のよさを忌憚なく表現して、うれしい句だ。

たしかに、この句に詠まれたような先輩がいるものだ。酒がいけるだけで存在の価値があるとすれば大したものだが、そうではあるまい。酒によって、阿呆になれる、近づきやすい人になれる。凡人に見える。

一緒に卓を囲んでこともが三人いる

近つきやすい人になれる。凡人に見える。

そのグループの油になれることのコツを飲みこんでいるだけでも立派に社会人としての資格があるのではなからうか。

〔九八〕

仕事追うスリルほんぼんにゃ判る

まい

(雄声)

仕事一辺倒の人間は儲けるとか損をするとかが問題ではなく、のるかそるかのスリルにいのちを賭けている場合が多いのであるが、そんなことは、苦勞知らずのほんぼんには判るまいと詠んだもの。借金王と云われた人たちの心境を深く見ると、たしかにそうしたところにあるように思われる。面白いネライの句である。

〔九九〕

おぼさんの恋参考にならぬ恋

(晚明)

世話焼きのおぼさんが、ワシらの若い時の恋の経験を語って聞かせるが、

「そんな参考になれへんわ」と、一蹴されたのであろう。

「ならぬことが、おますかいな」とは、おぼさんの心の中に、今でもひそむ恋心が、云わずにはいらぬのである。

〔一〇〇〕

神様が見通しですと拒絶され

(紫光)

不倫の行為を強要して拒絶されたのであらう。すぐに神様を引っぱり出すところを見ると、相手はかちかちのクリスチャンに違いない。

味も素ツ氣もなく拒絶された男の顔のいがみぐあいが眼に見えるようだ。

〔一〇一〕

出世した部下へ言葉は元のまま

(梅志)

出世した部下というからには、もう遠うの昔に縁が切れてる筈だ。

自分がその職を去ったか彼が元の職を去ったか。彼の方が去ったと見るのが妥当だろう。

「やあ、君。久しぶりだなア。すっかりやってるか」と云う言葉は旧部下披いだ。たと云うのである幾ら出世をした相手だからと云って、××さんとも、知事さんとも云えない心理を巧みに促らえている。こんな場合の親近感と疎遠は双方人物の大小によって決定すけられると思う。

〔一〇二〕

阿波踊

鳥追笠を深くかぶれば恋めきぬ

(薫風子)

見たままを詠んだ句だが、仄かに時めくものを感じさせる力はある。

阿波踊の情熱は筆者にも忘れられぬものがある。鳥追姿は生き残りの日本趣味か。

〔一〇三〕

応接間猫の親子が来てよこし

(久米雄)

一読すると、何んの奇もない句のようだが

が猫好きの家庭を細心に観ていると思う。

この応接へやがてあらわれるのはこの家の老婦人のような気がする。そこらを少々よ

ごそうが意に介せないのもこの種の婦人である。

〔一〇四〕

思ってる通りに論じてある社説

(藤波)

思ってるのと、書くのとは違う。誰れでも思うことは出来るが、さて書くとなれば

書けないものだ。社説を読んで、何んだ、ツシが思っていた通りに書いていると云つ

て、新聞を投げ出したのである。我が意を得たりと思つたのか、何んだ詰まらないと

思つたのか、そこまでは判らないが、軽い穿ちはある。

〔一〇五〕

人事異動へくつたくもなし碁を囲み

(日滿)

「きよう人事異動が発表されるそうですよ」と、BGがささやく。

「彼等の予定の行動だ。誰が部長になろうが、誰が左遷されようが、ツシらには関係ないさ」と、停年近い万年社員が、白石をつかみ出して云つた。

「くつたくもなし」の措字が、この句を活かしている。

〔一〇六〕

珠数持って来たに讚美歌うたいだ

(堰子)

告別式を詠んだ句である。珠数を持ってそそくさと出かけた。ところが来て見たら、

突然讚美歌を歌い出されたので、自分の迂闊さに思わず苦笑したのである。お互いは

斯うしたマの抜けたことに時々ぶつかるものだ。笑えないユーモアの句だ。

〔一〇七〕

ジョンニウォーカー眼薬ほどを注いでくれ

(静馬)

洋酒がいかに高価になったにしても、眼薬ほど注いで呉れたのではホロリともしないし、ありがた味もないだろう。眼薬ほどとは、すくない方の誇張であるが、それで高

価を支払われたのではたまつたものでは

ない。まして香港あたりで細工したニセ物のジョンニウォーカーだったりしたら目もあてられないだろう。

〔一〇八〕

みみっちい事は云うなど名譽税

(鮮山)

切手を貼り忘れた封書が届く。忙しいのに郵税を払らわされると妻がボヤク。今日は誰れやらの米寿の祝賀会やと出てゆこうとする夫に「そんなに親しい訳でもないのに、ヒマとお金を費やすのは、お止しなさい」と妻がなげく。「オレが行かぬと、地区会を代表して祝辞を述べるヤツがいないのさ。アテにされているからな」

「お行きになるのもいいが、会費はワタシの方から出しませんよ」

「お行きになるのもいいが、会費はワタシの方から出しませんよ」

〔一〇九〕

今日のメモ結婚式と葬式と

(どんたく)

近ごろは、なんで斯んなに忙がしくなったのであろうという言葉をよく聞かされる。私もご多聞に漏れない忙がしさだ。

きょうのメモを見ると、会社同僚の息子の結婚式と、親戚の告別式がある。

コレでは、こちらがまいい

てしようとい云いながら、急いでセーフティ・レザーを顔にあててるところか。詩美はないが、時代の姿はつかんでいる。

〔一一〇〕

我が腰の心細さよ大掃除

(保美)

大掃除と云えば昔は煤払いと云つて毎年十二月十二日に行なつたものだが筆者の嗚尾時代には春にしたものだ。大阪では真夏にする。十二月にしたのは新年を迎えるために、二年間の煤を払つたのであり、春にするのは虫が卵の間に死滅させるのが目的だし、真夏にするのは炎天に畳などを干して虫害を防ぐのであるから何れも理由のないことではない。それにしてもこの句は若いものが、体力の弱さをなげいている句で、

それこそ心細い限りだ。

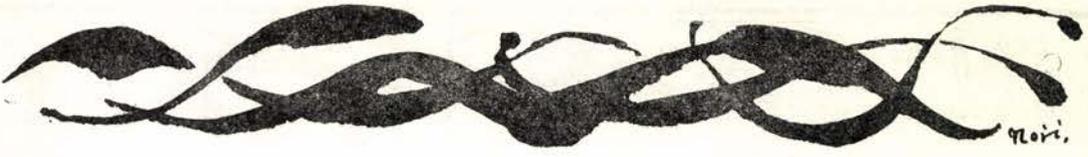


結婚式場 長生殿

近代的な設備をととのえた
関西一の結婚式場 貸衣装も
豊富にそろえております ● 6階



大阪日本橋
松坂屋
TEL 631-1171



川柳塔

麻生路郎選

右顧左べんせぬ潔癖さを社長買い
あえぎつゝ乳房は十人目を育て
定年も近く答辞の案を練り

鳥取市 河村 日満

投げ棄てたチリ紙くらげのように浮き

皆無口異動ほつほつ内示され

発表があるまで言わぬ水くささ

当てがいぶちへ異動の噂さえもなく

異動内示へ気の弱いのがもう休み

異動への抵抗二三日休み

人事異動へくったくもなし碁を囲み

徳島市 足立 春雄

踊る阿呆の方がよかった阿波の夏

言わんならんことも言えずに別れて来

倉敷市 木村 千容

自家用にひろわれ散歩辞せず

血圧の危機信仰の門にたち

倉敷市 田垣 方大

空席の多い机が大き過ぎ

転任の発車間際に好きなんて

これだから田舎はいやとハイヒール

大阪市 木村 水洞

論語には恩師にそむけと書いてなく

大阪市 市場 没食子

子の代に移る一步の結納日

最近身体異状

酒樽と写せし頃の我いとし

大阪市 正本 水客

満ひとつもう愛されている自信

天花粉ちつとも減らず夏がゆく

熱帯魚にも暑すぎる日が続く

あたまかすの一つに招待状がくる

高槻市 若柳 潮花

妻泰子の死に寄す(四句)

たった一日お前の無理を聞いたのも

仏飯はこれから僕がたいてやる

無事手術すませば妻はもう居ない

団地の夜虫さえ囁かぬ灯がさみし

兵庫県 小西 無鬼

扇風機の下は動かぬ待合所

金持って養老院のボスで居る

大阪府 西 いわを

菊作り去年と同じ鉢の位置

山深く誰が通るか草の径

大阪市 北川 春巢

先輩が養老院の医者になり

お稽古に行くお師匠はんお見それし

帰郷

見おぼえの真如の顔も仏問なり

ハワイ 羽佐間 柳葉

憲法は自由の国に皮膚の別

人種差別神の殿堂までも焼き

ストライキ末は自分の首も締め

防府市 長野 井蛙

どん底の女も鏡の中で生き

スト出来ぬ職場に社党は手を貸さず

うっ憤のはげ口妻がうけ止める

岡山県 直原 七面山

妻いつか僕の一部になっていた

不肖な弟子だから恩師の身を案じ

高槻市 福田 丁路

好意無にして礼儀と思ひ

ごほう抜きされるは吾が子あ、吾が子

夏の夜は更けてうごめく色眼鏡

大阪市 後藤 梅志

遙かなる珍客竹内君

出世した部下へ言葉は元のまま

年月はうれし今昔談に酔う

中古なら買いなと金の出来た父

米子市 小西 雄々

誰がやっても政治は同じものときめ

庭石が光りを増した俄か雨

夜を稼ぐための昼寝と他人知らず

大阪市 山川 阿茶

ニックネーム般若も女に甘かりき

老らくの恋もだんだんバタ臭く

布一枚あるとないところでこうちがい

PTA私もダイヤ欲しくなり

加賀市 那谷 光郎

生活力あるのと娘先に訊き

アイシャドールーージュ失恋した筈が

妻にまだ色香が残っていた水着

レジャーブーム死に山あり海があり

大阪市 福井野 迷路

日が差せば塵でも光る民主主義

寄りかゝる固い岩さえ揺ぐなり

荒稼ぎ犬に凝り石にこり

出雲市 尼緑 之助

あぶはちのたぐいとなつてのしあるき

水害一カ月

復旧と言つても家はマッチ箱

絶望の河原となつて見たたされ

水害の鉄橋のろく／＼汽車過ぎる

鳥取市 杉谷 潮山

金のかゝる児なり病院かえて見る

サッソーと砂利道行けぬハイヒール

トコロ天いやおうなしに押し出され

悼 耕民氏

耕民もう句会に誘つてはくれず

二十五を境に女実をとり

若者へいまましくも理に詰り

心をかざることには素顔を塗る如し

オーバーな新聞朝を不安にし

呉市 林野 魁光

爆音の町で気まゝに住みなれて

クーラーの音も気になる月夜にて

空席へ女の尻の素早さよ

橋下の日陰でトラックも昼寝

岡山市 服部 十九平

商売が大事教会疎遠がち

聖歌隊救われている顔でなし

腹の虫治まるまでは妻も避け

憎みあうことでくらしに張りが出来

西宮市 若林 草右

捨て育ちの胡瓜の方が実を結び

夕立に胃をぬいだ実力者

冷房もほどほどビール泡を消し

棺桶を作るせんだの木が太り

風呂をたく煙だけ立つ村となり

酒の害たばこの害を言うて呑み

はいた、き昼寝は持ったま、眠り

応接間猫の親子が来てよこし

岡川県 田村 藤波

思つてる通りに論じてある社説

美智子姫の母校へ娘を入れたがり

美智子姫の母校へ娘を入れたがり

美智子姫の母校へ娘を入れたがり



恩給に捨てた若さを後悔す

児島市 本田 恵二朗

消耗品みたいに金魚へってゆく

起きぬけの元気熊手を友にする

こゝに棚あそこに棚と妻の趣味

堺市 高崎 雄声

手近な避暑銀行は招いてる

のり利いた浴衣に妻の味があり

仕事追うスリルほんほんにや判るまい

抱いた子もいらぬものえは首をふり

高槻市 傍 島 静馬

よっぽどの腹立ち孫の頬を打ち

松下の夢が梅田で保護される

最っ先の寄付が近所の気にいらず

ベストセラーあいつ買うたら借るつもり

ジョニウォーカー眼薬ほどを注いでくれ

島根県 藤 井 明朗

千鳥足隣の犬は忘れたか

保育所の静けさ只今昼寝中

俄か雨止んでパチンコ入り出し

倉敷市 野田 素身郎

赤とんぼ乱舞失意の飯郷なのに

八畳の蚊帳もせましと寝返る子

夏もよしミスを暑さのせいにする

旅から帰ればすでに秋になり

珠数持って来たに賛美歌うたいだし

ネクタイの好みわかつて来たデート

役者根性芝居の筋の墓を訪い

席ゆづる善意の顔がてれている

逢曳は其の夜の星を見て居らず

女そして金殺屋の顔ゆがむ

岡山県 池田 古心

大阪府 早川 清生

豆腐屋を継ぐべく無智な妻探す

倒産の鮮商日本妻が逃げ

貧乏てほんにいやどすえと舞妓

鬼灯よわが七才に恋ありき

月見草恋も滴るもののうち

大阪府 橘高 薫風子

阿波踊

鳥追笠を深くかぶれば恋めきぬ

十郎兵衛屋敷恋しや秋に満ち

十郎兵衛屋敷

鳴門公園にて

遠めがね海の渦見てのどかなり

いっばいの生活を空裏持って行き

孫四人寄って襖を裂く競技

冷蔵庫みな飲み腰をまだあげず

神戸市 仲 どんたく

炎天の寺告別の列の中

ワイシャツの紅洗濯屋見落さず

メモ癖が妻に証拠をおさえられ

面接の子をうちの子と見くらべる

今日のメモ結婚式と葬式と

平田市 久家 代仕男

前向きでなどと施策もないまゝに

水橋

冠水の南瓜 魚雷が浮いたよう

水見舞の署長もパンツ一つにて

稲に棹さして筏でもらい水

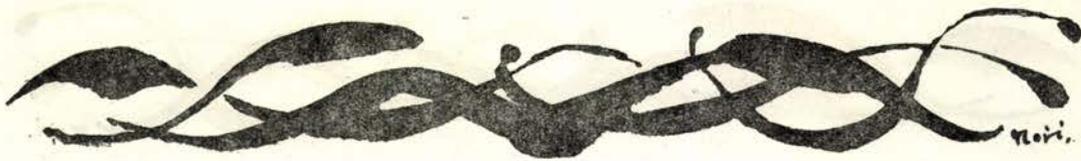
出雲市 原 独仙

老妻の愛情受けて茄子トマト

山陰洪水橋

人力の脆さ水魔は嘲笑う (コンクリート橋流さる)

この川が人呑んだのか渴れた儘 (洪水の爪撃)



西宮市 野 呂 鶯 汀

本当の母でないから肩を揉み

怒る今こゝに切り裂く物が欲し

蠅はもう子の臨終を知る如し

墓参り珠数持ち変えて蚊をたたき

新潟県 高 野 不 二

東京に誘るに香水だけのくに

弟の方が飛行機で帰って来

大阪市 魚 住 満 潮

続・西成界わい(全句)

商品化した女すっぱすっぱ嗅い

池田三選血を売る日が続く

生国は知らず耐を酌みかわし

どぶろくの辰と言う名で世を終り

水いらすずで娼婦と刑事話し込み

どうしても要る金ハガキの隅にまで

反対!!反対!!反対!!ガード下のピラ

お金のいざこざ母娘四五日口きかず

大阪市 石 倉 旅 風

全身に金魚脚光浴びて夏

病人の毒舌苦笑して許し

怒ってる間も振り振り通し

愛媛県 村 上 旭 童

自家用で墓石建てに帰って来

ポンプ揃えてくれて水のない田圃

すじ書きがあるかの如き試合なり

おけいこにレッスン子どもを追い回し

アパートに住んでお庭がほしくなり

大阪府 谷 沢 好 祐

女遂に水着で街を歩かんか

戦争孤児済めば交通孤児が出来

アルサロの朝トラックでビール来る

愛媛県 榎 紫 光

社長だけ強気で会社潰れかけ

神様が見通しですと拒絶され

歳だけの顔になってた遠い人

子の日記明日のも書いて遊びに出

また来てねそうはチョイチョイ行けぬとこ

目ざわりな位置ヘライバル来てすわり

ご注意の通り猛犬吠えかかり

青森市 工 藤 甲 吉

逢いたさ見たさあさっては長過ぎる

おじいちゃんと孫と八月へそを出し

女涼しく三分の一に着る

日本をしみじみ思う箸二本

京都市 室 井 八 九 寸

怠りを叱る硯の青い徹

新潟へ性善だった義捐金

クルマ持の子だけ運転手へ味方

本名は戸籍に預け喜寿祝い

岡山県 横 山 一 声

カラーフィルムでないのが惜しい西日光

小松市 関 戸 宗 太 郎

ピンボケの写真を記者にいただけ

学長の死を新聞の隅で知り

ダムになるあてさえなくて村を捨て

石川県 高 山 涼 髪

ボスの言うはした金とは家が建つ

蝶ネクをはずして作業衣に着替え

お客様に診察されている西瓜

借金はないよと言うて父は逝き

美禰市 安 平 次 弘 道

癩痺の子へいっそと思ふ恐ろしさ

山があるから登るではすまぬ救助

道徳もペーパーテストで採点し

いかめしい顔でエロ本押収し

愛媛県 渡 辺 晁 童



丸額が泣くよマジック五七五
金策の方のみたけて初老すぎ
老眼にかけてこの方世を諷し

娘就職

手放した小鳥まだまだ視野のうち

宇部市 平 田 実 男

人間の弱味で中元売場混み

埃とは別に立読み追うハタキ

中元の品へ野心を見抜かれる

富田林市 浅 川 八 郎

お茶酌みを機械の様に現代っ子

万人振り向かずとも微笑む作者

酒よりも困子が好きでかどとれず

岸和田市 内藤きさ子

朝顔の一つ咲いたへ云う愛想

三十五度の街でたこ焼売れている

霊場へ杉の巨木が加勢する

盆踊り赤井鼻緒で行きまひよか

倉吉市 奥 谷 弘 朗

人柄をにじみ出させるエチケツト

押切れず涙をのんだ甲子園

兵庫県 遠 山 可 住

うす禿へ風力1の扇風機

颱風が来るといふのに三味が鳴り
無神経な方ネと女将つねりに来
おやつあげて帰ってもらうハシカの子

兵庫県 河原みのる

長という名の付く人の多すぎて

ショウウィンドに写った俺が俺だとは

命あづけたにしては乗車賃安く

姫路市 隠 岐 不 醉

予報官又違うたかとにらむ空

月からのたよりロケットが着きました

鳥取県 清 水 一 保

泳げない娘とは思へぬ海水着

恐妻と云う事にして可愛がり

出雲市 中 川 晃 男

日雇の母を自慢の子は首席

よく出来た生徒で旧師記憶せず

二三年貯めて十日の旅をする

前歴が立派で職をまた逃がし

松江市 柳 楽 鶴 丸

水の上に帰ったと冗談云う息子

李ラインを知らずカメメの楽しそう

水の都へ皇居を移してはいかか
京都市 都 倉 求 女

電器屋の店員扇風機かけテレビを見
ポンと押しても歪んでおらぬ盲判
これいいねあれもイイネと妻買わず

兵庫県 大江 秋 月

台所迄保険屋が追って来る

紙コップでは乾杯も味気なし

笑わしに来るお見舞の有難し

大阪府 松 田 半 月

熊騒動熊を撃つより餌をやり

わが声は耳に訛りは気が付かず

今治市 越 智 一 水

石風呂で昔の恋にゆきあたり

断水へ妓は打ち水を楽しめず

内職のささいな金で内がもめ

義捐金持ってきたのに時間切れ

竹原市 山 水 静 水

駅前の地図をポカンと見るも旅

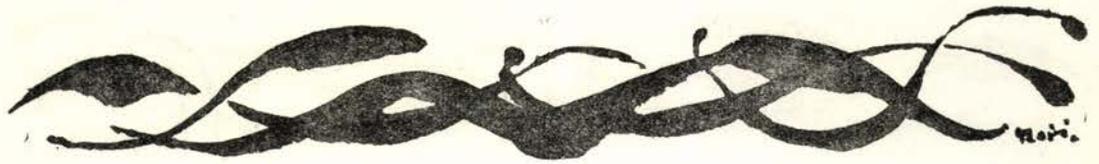
例へからして保険はきらいなり

プライドを捨てたその日に職に就き

病み上り妻の香油のよく匂う

新居浜市 小 林 孝 正

衿化粧もしてお勤めに出る不幸
芸妓もう島田横向くほどに酔い



貧乏も馴れて笑いのある暮し

改装はしたがやっぱり元の味

熊木県 有働芳仙

冷蔵庫麦茶ばかりのビール瓶

子宝がなく猫くさい御邸宅

酒臭い臭で宿題解いてくれ

大阪市 賀本昇

居眠りの姑へ声をかけそびれ

看護婦も煩杖をつく午前二時

同舟近詠



東京都 富士野鞍馬

漢菜を信じ社長は元気なり

須坂市 高峰柳児

不快指数金魚も泡を吐き続け

よろめきがどっちも積極性に燃え

病人の貫禄髭づら許される

そばすする音へ満ち足りている老母

妻へ折れ子へ折れ停年うづくまり

先輩の取柄は酒がいけるだけ

街頭も実る秋なる妊婦服

折れて出る腹へ相手に出し抜かれ

昼酒を役得こわごわ触れている

お土産のあげ底素早く子が見つけ

和歌山市 秋月宏方

天命のうちに欠伸もする時間

空くじいつまで僕の金をとり

左筈別に気にせず現在ツツ

逢うたびに旧友旅をした話

積み重ねて待機してます棺桶屋

商品として棺桶も並べられ

炎天に咲く日まわりは情熱家

雲の峯ここから夏の詩が生まれ

夏はいいなみんな裸の夕ご飯

海を夏を謳歌するよな雲の峯

大洲市 米沢晩明

浜の砂そのまま洗うゴム草履

濡れ縁へ秋を感じた足の裏

木魚のリズムに扇子合っていた

帰郷ただ神経をすり減らし

孫の手は玩具のように肩をもみ

便箋の紙質に噛われそうな文字

方言丸出し陳情力あり

保育園みんな利口な顔で寝る

おばさんの恋参考にならぬ恋

今治市 月原宵明

妻の座の強さ働き蜂瘦せて

消息を聞けば昨日が三回忌

わが家を歩くに団扇持つ暑さ

ハイヤーで来てざるそば喰べて去に

貧乏は嫌い秘書課で嫁き遅れ

寄席の隅笑いこらえている孤独

着斗のヒーロー異動に消えてゆき

夏の高校野球

部費たんとできて一回戦で負け

陽まわりが激しい情事知っていた

痴話げんかどころか東京水がなし

名刺の静けさ私の靴ひやく

名古屋市長谷川鮮山

スマートになったはいやなほめ言葉

手の届きそうに今夜の近い星

顔に喜び出さない父で物足らず

みみっつい事は云うなと名譽税

だましとる女の顔の白々し

コーラ飲む音も涼しいのど仏

もう客の仕度は出来た玉すだれ



川傍柳初篇研究 (一九)

丸十府 高須啞三味
 岡田甫 前田喜代人
 川端柳風 清博美
 藤井和雄

215 跡へ来てつばなの錢を下戸払い

葉十

川端「花見宴の跡の、踏み荒らしたつばなの弁値を、下戸が払った、という句。

高須「「つばな」は「茅花」で、チガヤまたはチガヤの花のこと。野掛あとの酔っばら以後始末を、下戸がする句で、こんな場合、正気の下戸は、いつも損な役回りばかりすることになる。

前田「早春に、主として子供達がツバナの穂を集め、小さな束にして、一文、二文で売り歩いた。穂の開かぬ前の綿状のものが、葉の巻いた中にあり、これを童子代りに食べた。別名をチ、チガヤ、フシゲチガヤと言ひ、禾本科。

つばな売り一步出されてペソをかき

(タル二〇)

がある。前説「花見宴」とか「野掛けあ」とか限定する必要はない。

藤井「とにかく「下戸」とあるからには

「上戸」もいなければならぬ。酒をのんで騒いでいる連中の所へ、ツバナ売りがやって来た。酔った奴が「よし買ってやる。みんな置いて行け」なんて景気よくどなったが、小銭がない。それを下戸が立て替えてツバナを受取っておく。金額は少ないが、毎度のことながら、下戸は損をする。

丸「野掛けなどで、連れの生酔いが、ふざけて、ツバナ売りの子から二、三把ひったくって行く。子供は、ペソをかいている。後から来た下戸が、子供をなだめて、ツバナの代金を払ってやる。

つばな売り生酔に二把ただとられ

(タル一〇)

の跡始末で、高須説がよい。

岡田「諸説に尽く。

216 やり売のしきりに通る時あかり

一甫

川端「やり売り」は、五月節句の玩具の槍売り。「時あかり」は、雨が一時上が

る事。端午の節句は、男子の節句なので、戸毎に幟を立て、小さな甲冑などを飾って祝う。その玩具の槍を、雨の晴間々に売

り歩く「槍売り」を詠んだもので、既出の198年に降るぞへと槍売り値切られる

(12オ)

の通り、値切られたであろう。

高須「前出「今に降るぞへ」で異を立てて失敗したから、これは素直に礎解に従っておこう。

丸「贊。

岡田「贊。——旧五月は、今なら六月上旬で、そろそろ梅雨に入る頃である。古川

柳の解釈には、一カ月ずらして考えることが必要である。

217 よしきりの巢を見た切りに和尚する

秋紅

川端「よしきり」は、よくししゃべる供人の称。よしきり雀の鳴く声に比したもので、太鼓持のこと。ここである「よしきり

の巢」は遊里のことか？ 破戒僧の弁解の言葉と解する。

高須「俳句の方では「行々子」これはギョギョシと鳴く。その鳴声から取ったもので「葦切」とも「葦雀」とも書き、和名を「よしわらずめ」という。だから、この句は、和尚が遊女宿をのぞいただけで帰ったという句で「よしきり」と「見たきり」とを掛けたものではあるまいか？

前田「よしきりで客の別れるけちな所

(傍三二)

から推しても、高須説を取るが「きり」の掛言葉説には賛し難い。

岡崎「高須説賛。だが、この破戒坊主、覗いて来ただけというのは、言訳けにすぎず、実は女郎買ひをして来たのである。

清「芳町の陰間買ひと考えていたが、諸説を読むと、どうも女郎買ひらしい。

藤井「高須説をとりたいが「よしきりの巢」が納得できぬ。「よしきり」は芳町だと思ふのだが……。

丸「難句の一つ。自信はないが、字句通り「和尚は、よしきりの巢を見たきりにする」と解する。すなわち破戒僧でなく、一かど俗離れした僧で、俗人ならよしきりの巢を見付けたら、これは珍しいとばかり、卵をとったり、雛がいたら、雛を取り出したりするところを、この坊さん「おお可愛い」のう」と一言、巢には手もふれなかったと、そのままに解したい。

岡田「丸先生の解通り「よしきりの巢」を見ただけの僧と解する。

高須「この場合、どうして「和尚」でな

くてはいけないのか。「よしきりの菓」を見にきりにするのなら、むしろ俗人の方がむずかしいのに、生きものには手をふれぬはずの和尚が「見たきり」にするのは当然と思われるので、何か句のウラがあると思うのだが、句面通り解していいのだろうか？

218 大門の前も日月おそひ也

八中

川端II「大門」は、吉原遊廓の入口の大門。大門は未明に開けて、夜は四ツ時(十時)に閉め、それ以後は左手の潜り口から出入りさせたので「和漢朗詠集」の「長生殿裡春秋富、不老門外日月遅」の意をとって、仙境にたとえたもの。

高須II「大門の前も」の「も」が判らぬ。「日月がおそい」のは、大門の中として、未明から四ツ時まででは、別しておそいとは言えぬ。仙境だから日月がおそいのは大門内のことであろう。

前田II両説に賛成。「も」は、大門の内もそうだが、前も同じようにの「も」であろう。高須説の「おそいとは言えぬ」は、どうであろうか。

岡崎II確稿の和漢朗詠集にある「……不老門外日月遅」は、大内裏の豊楽院の北面にあたる不老門であるが、これを吉原の大門にもたとえ、この不老長寿の歓楽境では、日月も悠々として、この歩みも遅いであろうと礼讃したもの。

藤井II岡崎説で「も」が明解。これで、江戸ツ子の吉原自慢が生きて、佳句となる。

る。

丸II確稿に賛。「も」は、朗詠集の「不老門前日月遅」にかけて、吉原の大門の「も」の意。

岡田II諸説に尽く。

219 度々ふくら雀にしたでつるされる

一甫

川端II「ふくら雀」は、俳優中村歌右衛門のことだが、意味が解らない。福来雀そのものか？ 御教示を乞う。

高須II高尾太夫、度々不機嫌な顔をした報いをうけて、三又で最後に吊し斬りにされた。

岡崎II高須説に賛。仙台侯伊達家の紋は、竹に雀二羽だ。この仙台侯の意にしたがわず、度々不機嫌にさせた(ふくれる)ふくら雀の縁語)ので、吊し斬りにされた。

清II綱宗は、身請けした高尾を船に乗せ、芝の下屋敷に帰途中、三ツ又近辺で吊し切りにして、川へ放りこんだ。

藤井II伊達公の紋とは気がつかなかった。仙台公のふくれっ面を、言外に言い得て妙。

丸II賛。

岡田II「竹に雀は、仙台ザンの御紋」という童謡もある。

220 艸深い所に武人いい娘

五 楽

川端II小野の小町と紫式部。「艸深い」は関寺小町(或いは通い小町か)と、紫式部は江州石山寺で源氏物語を書いたと伝えられる。

高須II嵯峨野の祇王。祇女。清盛からのがれて、その草深い所に、二人は庵を結んで、終生を終えた。

前田II高須説が安定しているが、あまり概念的で面白くない。

八重葎しげれる宿に女衞来る
山出しを杉戸物だと安くつけ
狩人の子を吐すなど女衞言

があるので、女衞が田舎で娘を見つけた句と取りたいが「二人」とあるのは、ちょっとひっかかる。

岡崎II高須説に賛。

清II平清盛の寵愛をうけていた白拍子の祇王は、後から現われた同じ白拍子の仏前に負けて

もえ出るも枯るも同じ野辺の草
いずれか秋にあわではつべき
という一首を書き残して妹の祇女と共に
嵯峨へ引きこもった。

(タル二〇)

清II高須説に賛。尼姿であったが、定まった夫がないのだから「娘」といって、言えないわけでもあるまい。

岡田II嵯峨野に隠棲したとき、祇王は二十一、祇女は十九歳。なお上五「草深い」は、京都郊外の深草をきかせた作かと思う。ただし、深草は洛南、嵯峨は洛西で、方角がちがう。だが、江戸の作者なら、このぐらいの誤ちはザラで、大してとがめ立てするまでもあるまい。

丸II「草深い」は、深草の里の暗示と見て、解に不安定を感じていたのだが、岡田

説で「江戸の作者の大様な誤り」と知って落着いた。

221 はせつ子が居たと岡釣のぞかれる

鼠 弓

川端II「岡釣」とは、舟に乗らず陸上から釣りをすることで、川岸で釣りをしていると、道を通る人に覗かれる。

高須II小さな沙魚ツ子、が魚籠の中に二、三匹、それでも釣っている当人は、得意満面か。

丸II賛。これだけの句だが、嫌味のない素直な句。淡い味がある。

岡田II賛。ただし、覗いて「ハセツ子がいる」と言ったのは、子供と思う。
222 ぬ庭で見上げ見おろす松の内

五 連

川端II不明。「松の内」は、元日から七日までの松飾りを取り除かない間のことだが、何を庭で見上げ見おろすのか、解らない

品質優良
先カペン



大阪市東区常盤町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社

ペン紙
ワゼム
カワ画
チカワ
タチカ
タチカ

い。松飾りだったら、庭ではないと思うの
だが……。

高須川嫁が追羽子を見ているのであろ
う。仲間に入れて貰いたいが、娘ツ子のよ
うにハシヤギもならず、羽根の行方を追っ
て、見上げ見おろすのである。

藤井川見上げ見下すで、お軽と大石のよ
うな舞台面と思っていたが、羽子ならば、成
程と感心、何かの文句取りでもあろうか？
丸川賛。但し、見ているのではなく、つ
いているのである。「見上げ見下す」に、
その真剣な態度が現われて、そこにまた初
々しい嫁の年令も感じられる。こんな所へ
年札の人でも来ると、

はこの子をつきすてにして嫁かくれ

(タル八)

ともなるのである。

岡田川羽根つき説に賛。まだ若い嫁。古
川柳で「嫁」という場合は、姑に対する嫁
は別として、まだ結婚後一、二年の間の、
子がまだない若い嫁を主として言う。それ
がやがて内儀と変名、そしてまた山の神と
変名するのである。

223 いい旦那百軒程の割に付

鼠弓

川端川「割」は、ここでは仲裁者とか調
停などの意。「いい旦那」は大屋さんのこ
とか？ 人がいいので、そこら近辺で何か
もめごとでもあると、相談に来るといっ
たこと。

高須川「いい旦那」は「いい檀家」で
「割」は「割合」——「百日那」の百軒位の
割合で寄付についたという句で、別に奇は

ない。

前田川わからぬ。

岡崎川高須説に賛。

藤井川「顔がいい」人は、それだけ万事
わりあてが多い。百軒分ひきうける旦那
は、町内で指折りの顔役だろう。高須説に
賛。

丸川高須説賛。

岡田川同。益、暮に百文しか御布施を出

さぬ百日那に対してその百軒分、すなわち
百文の百倍は二両半にあたる。お益に一両
も出すのは、お寺の一旦那。

224 金・色・の文字すわったを局着る

眠狐

川端川「局」御殿女中で、一室々々に仕
切った部屋で、長局とも呼んだ。「金・色
キの文字すわった」は、豪華な着物と、殿
様の威を着るの掛け合わせで、局は虎の威
を借る狐のように、我儘の仕放題だとの意
か？

高須川ただ豪華な衣裳のことを言ったの
であろう。お局は、自分の好きな歌など縫
い取りさせたものを着たから、それを「コ
ンジキの文字のすわった」と言ったまでの
こと。

前田川高須説に賛。

清川性の抑圧が、こんな形になって現わ
れたものか？

丸川同。「ぼたもちで字を書いたのを
ほね着る」(タル一五)「こんじきの文字
すをお局へ着くし」(タル一六)

岡田川「お局」とは、主として御殿女中
のうちの格式の高い年寄(といっても、三

十歳余ぐらいて年寄格になるものもいる)を
指している。年寄格になると、五百石以上
も貰えるから、へたな旗本より大したも
の。例の江島・生島事件で天下をさわがせ
た江島など、三十余歳で、たしか七百石も
取っていた。お局がデラックスな衣裳を着
るのも無理がない。

225 範頼ハぐっと上座にだまつてる

水苔

川端川範頼は、源義朝の第六子で、後見
頼朝にうとまれ、弟義経同様殺された。
「弟のするを範頼あぶながり」のように、
義経に比較して内気で実行力に乏しかった
ので、芝居の大将のように、上座に座って
いるだけだと、比論したのであろう。

高須川伊豆で不幸な生涯を終わった範頼
の、生きていても何ら実権のなかったこと
を詠った句。

丸川何かの場面を詠んだものと思われる
が、それを治定し得ないので、大体両説の
如く解するも、落着かず。

岡田川芝居の範頼役と解す。

楽屋では範頼公に茶を汲ませ

(タル五三)

という句もある。正面上座にいるが、ど
うせ飾り役のベイベイ役者で、一言もしゃ
べらぬうちに、幕……。

丸川範頼の出る芝居というのは何か？

芝居の外題、場面は何か？

226 かん略な法事位牌をツツ出し

秋江

川端川「かん略」は、勘定つくで儉約を
することで「勘略」とも書き、二年続きの

法事を儉約して、来年の法事も今年一緒に
済ませた。

高須川法事を合同して済ます簡略さを言
ったもので、二年続く法事を一年で済まし
たとか、月は違っても命日の同じ仏を二
つ一緒にしたとか、或いは心中者の法事と
か、いろいろ考える人あろうが、それはど
れでもよからう。

前田川心中説をとる。

岡崎川同。だから、世間をはばかって簡
略な法事である。

清川心中説はとらない。あくまでもケチ
な法事で、先祖の法事などを二つ一度にや
つてしまふことと考える。

藤井川親父の七回忌と、お袋の三回忌
を、経済上の理由で、どちらかをすらすらと、
一緒に済ませた、とすれば、位牌二つがわ
かる。諸事節約で、お寺さんもこぼしてい
る。世も末だ。どちらでもよい高須説をお
す。

丸川確稿および清説に賛。祖父祖母、父
母、それに先立たれた子供などの三回忌、
七年、十年と、一人一人キチンと法事をや
つてはたまらない。一年ぐらいの違いな
ら、二人の法事を一緒にすることは、自分
の郷里などでは普通である。お寺さんも当
然の事としている。

岡田川諸説に尽く。

(十四才)

227 さばかりの男羽織にうづめられ

眠狐

高須川「さばかりの男」とは、この際
「角力取」のことであろう。勝負力への祝

儀に、観客が羽織を投げる。それを「埋められ」と誇張したのであろう。類句は左の通り。

ちいっさな羽織を貰う勝角力

(タル一四)

草木にない花の散る勝角力

(〃三七)

勝角力衣類異形の花がふり

(〃〃)

散る花を帯でたばねる勝角力

(〃五二)

散る花をひったばねたる勝角力

(〃七二)

散る花をひったばねたる勝角力

(〃一〇五)

前田「さばかり」は「これしき」「これくらい」の意で、重く見る場合にも、軽く見る場合にも使う。「うづめられ」は、高須説でないと活きないから、高須説に賛。

藤井「角力取りの句であろう。「さばかり」はいささか嫉妬の意がある。角力取りの奴、大食いの他に芸がなくて、勝負に勝ったばかりにあの騒ぎ「一年を二十日ですごすい男」の角力取り礼讃に反対のケチをつけた皮肉な句と思う。

丸「さばかり」は「さあるばかり」の略で「それほどの」「あれほどの」の意。見事強敵を打負かした「それほどの」男、勝力士も……と、礎解に賛。「さばかり」の例句を左に。

さばかりの大河を松はおよぎそう

(傍三二七)

岡田「丸先生の引用句は「大川（隅田川）」へ枝を長く差しのばした首尾の松を畝んだ句であるが、これでも判るよう「さばかり」は「あれほどの大男が」の意で、高須説よし。

高須「娘のために引いたオミクジが十九番だった、と言うのは「十九厄年はらむか死ぬか」と言われた、女の大厄年を言ったもので、もちろん「大凶」であろう。それで「こわいもの」になるのだが、余り感心できぬ。

たつた今十八九と橋の人

(玉四)

などという句もあり、類句は沢山あると思うが、いま思い出せぬ。

岡崎「娘が十九歳。吉凶を占うために引いたおみくじも十九番。さても縁起の悪いこと、というだけの句。

藤井「高須さんに代わって、十九歳の句を調べて見た。

228 こわいものおみくじも第十九番 五 楽

高須「娘のために引いたオミクジが十九番だった、と言うのは「十九厄年はらむか死ぬか」と言われた、女の大厄年を言ったもので、もちろん「大凶」であろう。それで「こわいもの」になるのだが、余り感心できぬ。

たつた今十八九と橋の人

(玉四)

などという句もあり、類句は沢山あると思うが、いま思い出せぬ。

岡崎「娘が十九歳。吉凶を占うために引いたおみくじも十九番。さても縁起の悪いこと、というだけの句。

藤井「高須さんに代わって、十九歳の句を調べて見た。

労働の娘行年十九なり

(タル一一)

お十九でやれやれと言う天蓋や

(タル一〇)

二十一と三年の法事する

(タル一七)

はめられてこの世にたつた十九年

(タル二〇)

薄墨で昨十九日娘こと

(タル二二)

十九年たつた桐の木下駄や買い

(タル四八)

葉礼に出た金ばかり十九両

(傍一)

さかさ事はばあ九十だに達者

(傍二)

十九帖目を読みかけて床につき

(傍三)

三十一年早く死ぬむごいこと

(傍三)

三味線が二と琴の払いもの (傍五)

十と九の糸が切れたで気にかかり (〃)

丸「諸説に尽く。 (〃)

岡田「同。(藤井氏の引用句。出典を示した。労を惜しむなかれ。)

藤井「岡田先生に叩頭、以後気をつけます。

高須「藤井さん、ありがとう。少し身辺多忙のためなまけて済みませんでした。

229 馬に八乗てみる赤のまんま也 龜遊

高須「初潮祝いの句で、前にあった」と添えて「と同じ調の句である。「馬には乗ってしろ」は、娘の月経帯の人工の(おもに母が作ってくれる)ものは、馬の手綱式のものだったので、こう言ったので「赤のまんま」は、もちろん赤飯をたいて祝ったからである。

前田「賛。「馬」は月経帯のことから、月経をも言った。

そこそこを押えて女馬に乗り (タル二二)

十三四姫はお馬に乗りならい (?)

岡崎「賛成。俚諺「馬には乗ってみよ、人には添うてみよ」の文句取りでもあらう。

丸「賛。

岡田「同。但し、前田氏引用の前句は、本当に馬に乗る女の句である。

パ ッ ク ・ ミ ラ ー

本研究に関するご発言、なんでもどしどしお寄せ下さい。〃係

高須 啞 三味

210 岡場所ハこれがいやたとうるたへる 前月号(八月)に「吉原は官許だからないが、岡場所には時々警動(臨検)があった」と、礎稿(藤井)が言っているが、その「警動」という言葉に、この文字があてはめられたのは、いつ頃からか、気になって、調べて見たが、わからない。

「川柳語彙」(宛姓外骨編)に依ると「賭場又は私娼窟へ捕吏の入る事、現今いうドサに同じ、語原は不詳であるが、「譚海」には、同心衆の代理としてケト(穢多)が捕吏であったに起こると記してある」とあり左の二句を挙げている。

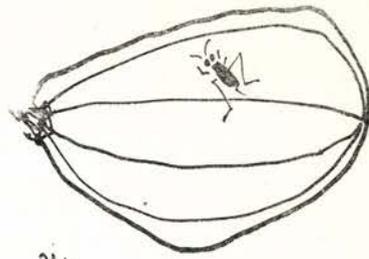
けいどうの言分け日なし聞き飽きる 歌かるたよろものでけいど入れ

食品と原資材機械包装の総合誌

食品と科学

Food Science

本社 大阪市北区源蔵町5 (361)9373代
支局 東京都千代田区神田築地町2 (291)9629代
名古屋市昭和区村田町2 (88)9069



隨想

二つの流れ

——「六十一」の句から思う——

麻生路郎

私が還曆を迎えた時に、
六十一まだ情熱は
燃えに燃え

と詠んだ。ところが石井寿一氏
(大阪日日新聞社長)が、ニンマ
リと笑って、
「相手は二十七か八か」と云われ
た。それは終戦後マのない頃だっ
たと思う。

私はこの思いがけない新解釈に
一寸戸まどうたが、とっさに否定
していた。

「この句は最近、私が還曆を迎え
たので、今後の柳界に対して、い
かに生きるかを句にしたのに過ぎ
ない。この句の構成には恋情の意

味は微塵も含まれていないのであ
るから誤解のないように」と私は
大マジメで答えた。きょうこの頃
なら、「まあ、そんなところか
な」と多少余裕のある言葉で受け
流すことも出来たであろうが、何
んしろ、その頃の私は言葉にペー
ルを着せることを知らなかった。
それは、いまでも持ちつづけた私
の若さである。

石井氏も、私と云う人間をよく
知っているだけに、その点は判っ
ていたので、この句の話はそれき
りに打ち切られた。

それから、十幾年も経った今
日、何んの気なしに、私の枕辺に

ある私の旧著「新川柳講座」を引
っぱり出し「表紙をめくると、見
返えしのところに、私の筆で、右
の句が書かれてある。「新川柳講
座」の奥付を見ると、昭和二十三
年六月十日初版発行とあるから、
右の句はそれ以前の作に違いな
い。

この見返えしに書いた句を見て
いて、前述の石井氏との対話をラ
ト思い出したのであった。

そして、改めて石井氏の解釈と
私の創った当時の句意とを対決さ
せて見た。

なるほど石井氏が、「相手は二
十七か八か」と、老らくの恋を詠

んだものと解したのも一理ないこ
とはないと思った。むしろ、この
解釈の方が、従来柳樽式的な解
釈としては妥当ではないかとさえ
思った。では、還曆を迎えての私
の心境を詠んだのは川柳ではない
のかと云うと、柳人には一般に、
私の作意以外の解釈をした者はい
なかったで、名句ではないかも
知れぬが、川柳であるか、ないか
の疑いを持つものは今日まで、一
人もいないのである。

以上の結論から、私は川柳の解
釈に二つの流れのあることを知ら
された。

私は今から六十一年前に川柳を
創りはじめたが、その頃はシャニ
ムニに柳樽式の句を作っていたの
である。それが同じ柳樽式の句で
も、いつのほどにか、宝曆、明和
の句振りに心酔し、宝曆、明和の
句を凌ぐ句を目指して作句しだし
たが、明治四十一、二年頃には単
に古句を凌ぐと云うだけの目標で
作句することに飽き足らなくな
り、新しい独自の句を生み出すこ
とに意をそそいだ。

従来柳樽式の句は客観的であ
り、批判的であり、社会風俗詩と
か、人事詩だとか呼称され、それ
が川柳の正道であるかの如く云わ
れ、私たちの主観的な個人の情緒
や感動を表現する抒情詩的な川柳

は邪道で川柳でないとい片隅へ押し
やられようとしたものである。
近ごろの現代川柳派よりも、もっ
と荆棘の道を歩いたものである。
伝統派から、あれは新派だと言
う名をもううまでには相当に長い
苦難の道が続いたのであった。
そして人生派のわれ等の川柳に
腐心した。ローマは一朝にして成
らずである。私たちは一步一步前
進して、今日の地歩を踏みしめた
のである。

前述の二つの流れは今後も絶え
ないであろうが、川柳がいつまで
も批判詩として存続するかは疑問
だと云わねばならない。将来は柳
俳が一つの旗の下に集まるか
も知れない。無季俳句が川柳に溶
け込む時期が来るとすれば、おそ
らくその時こそ柳俳一如の実現を
早めるであろうと思われる。

思わず筆が川柳の将来に走った
が、それは誰れしも予断の出来な
い問題であるから、これぐらいに
止めて、再び前述の二つの流れに
就いて縷述して見たい。

私の句に、

俺に似よ俺に似るなど

子を思い

と云うのがある。これは四十年ほ
ど以前の句で、その昔「文芸春
秋」で賞められた句だが、特に新

次号特集予告

① 失礼ですが

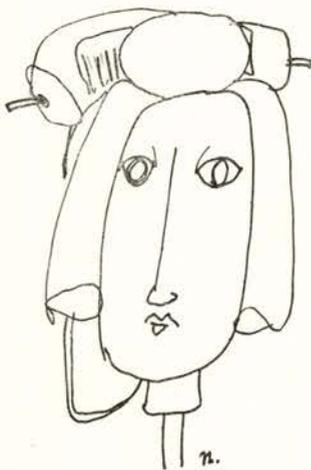
あなたの奥さんはどんな方？

— 叱られない範囲でお洩らしくください

② あなたの奥さんをモデルして詠まれたと思われる句をお示し下さい

斯うしたアンケートに、どんな素晴らしい回答がいただけただけでしょうか。次号をご期待下さい。

— 編集局 —



しいとも思わないが、陳くもならない句であると思う。子ぼんうの私の句として私の死後にも誰かのアタマの底に残る句かとも思うが、そんなことはどっちでもいいと思っている。

拙吟のうちでこの句ぐらい多くの人たちに褒められた句も少ないが、この句ぐらい転載されるのに、誤記された句も少ない。名句だ名句だと云って、柳詠や新聞などに転載されるたびに誤記されているのを見て、私は苦笑するのである。

「子」を思いがいつも、「子を育て」と誤記されているのである。この誤りは、私の句を、私の主宰する「川柳雑

誌」か、私の句集「旅人」から転載しないで、自分のアタマの中におさめてあった私の句を引き出す時に、自分式表現で発表するのが原因であると思う。私がいづも云うように、他人の句を引用する場合には、必ずその作者の句集又は確実な文献に寄ることである。世の中には孫引きの誤りも随分多いので、いい加減な引用ならむしろ避けた方がよいと思う。右に述べたように、悪意ではないにしても「子を思い」を「子を育て」に改作して発表されることは作者としては、この上の迷惑はない筈だ。改作された句を褒められたので、尻こそばゆい限りである。いつかの金沢の新聞に、川柳

会と生花の会かの合同の催しの報道記事の中に、この句が色紙に書かれて飾られた写真が載っていた。それが矢張り「子を育て」と写っていた。しかも下手な字で書かれ、路郎と署名までしてあった。悪意はないのであらうが、ここまでやられると、作者ならずとも好感は、持てまいと思う。作者の許しもうけずに句を利用するのもいいが、そんな場合には句は活字体で書き、「路郎氏の作」と云う註を入れる方法もある筈。曾て、岡山で川柳まんじゅうを売り出したが、その函の中に、私の句の偽筆短冊が入られてあって嘩然とされた。その時の句も「俺に似よ俺に似るなと子を背て」であった。良心的でないことを平気でやるようでは柳人としての資格はゼロだ。前に云った「子を思い」を「子を育て」と誤記する人たちは殆んどが柳樹式表現に育てられ、その型式が骨のズイまでしみ込んでいるのであらうと思う。

斯ういう柳人たちは、「子を思い」と「子を育て」と、どう違うかをジツクリと検討して見る必要がある。

スマートで
着心地良い

GOLDEN
O.S.K.の
紳士服

各地特約店に有り

帖づれづれ規子

八 大 野 東



昨年夏はうちにへちまがぶら下がっていたが、今年はおぼやかに肩がわりした。へちまは食えないからである。家内にすればこう物価が上がったのでは、眺めるだけのへちまより、かぼちゃが実質的だと判断してのことであろう。

終戦直前のことだが、四国伊予でへちま棚の下で酒を飲んだことがある。飲みながらだりとして、いる幾つかの青い奴を見上げながら、この亭主は空き腹で詩を作るエライ奴だと感心したことだ。

「へちまはひょう逸なことだがトリエで、食べたものではない。人間世界の足し前になるのは垢すりと靴の中敷ぐらいなもので、下賤に過ぎる」

なんてへそまがりの父があると、きそういって私の川柳趣味を笑っ

たことだが、私は、ヘチマコロンは顔につけるんだ、と強がりをつたものだ。

おとといの糸瓜の水を取らざり

き
糸瓜咲いて啖のつまりし仏かな
啖一斗糸瓜の水も間にあわず

ご存知これは正岡子規の辞世の句である。この三句をみるとへちまは美容どころか薬用だったらしい。

子規はへちまを愛した。いや、愛さざるを得なかったのではないが、二十歳から死に至るまで病床にあって身動きもろくにできない彼にとって、身近かにブラ下があるへちまへの想念が、やがてはそれとは切っても切れない間柄にさせ伊予松山には子規の墓がある。

角型に子規のプロフィールをはめ込んだ近代的、というより洋風の墓だが、私はこの石の面から『俳句宗』と称される虚子一門を中心とした伊予松山のすさまじい俳句熱に感心したものである。前田伍健さんは「私が俳句をやっとりまして、川柳の伍健ほどは有名になりませんでしたが」とよくいわれたものだ。伍健さんは子規を大層敬慕していられたようだ。当時、私は大陸から引揚げてきた早々の身で、三十五、六歳だったから子規の示寂した三十六歳と年齢だけは匹敵していたわけで、子規を仏より神サマとみる人氣に今更ながら偉大な子規の足跡に驚倒した次第であった。

子規の祖父は、松山藩久松侯のお茶坊主で、連歌師としては藩中切つての人だったらしい。その血をまっすぐに引き継いでいけば、川柳への関心も深まったことだろうが、残念ながら子規の母が藩備大原親山の長女とあって、そのしつけは漢学にこり凝った。五歳に子曰をやり、十一歳で絵を描き、神童といわれた由。十六歳で帝大國文科に入り、抜群の秀才ぶりをうたわれたが、胸を病んで二年で退学、啖血したのが二十歳で、三十歳には重症の脊随カリエスに侵された。どこか北辺の水原社で敢闘した論客田中五呂八に通じるような青春を送ったわけだ。五呂八も帝大生で肺を病んだ。当時の帝大の学生は、明治の格別な学識に

培かれ、漢儒の筆法は論評一つにしても、今日の比ではない。五呂八の柳論、子規の俳論はいずれも評介なまでに飽くなき理論追究をやつてのけているのも若さをプラスしてその辺からきている。「俳句を研究せねば、足利以来の日本文学とその思想は到底せん明することはできない」

二十歳のとき、そう考えて子規に、俳句研究に乗り出した。この点も田中五呂八に通じるところがある。田中五呂八は子規のこうした動機に共鳴したとも私は考えられるのである。

子規は俳句研究の結果「紀の貫之はへたくそな歌よみで、古今集ほどくだらぬものはない」と当時の歌壇に対し一発ぶつ放した。五呂八が「文語体調は今日的には最早時代遅れだ。和歌や俳句は、すべからずこの弊を一洗して顔を洗って出直せ」と川柳の場にたつてかく喝破していたことだがこれもまたよく似通っている。

子規の言文一致による俳句、和歌文章の活達な実践活動は、病中を推してのことだけに驚嘆のほかはないが、反面病中にいたからこそ、その研ぎすまされた秀技な脳中のすべてが吐露されていったものとも思われる。

いずれにしても、へちまの水を手、その青い葉裏から時には冷たい月影を覗つたであろう子規に、私は私なりに凄絶な病臥の彼の瘦軀を思い浮かべるのである。

「このごろ左の肺の内デブツツツという音が絶えず。それはブツツ不平を鳴らしているのであろうか、或いは仏々々と念仏を唱えているのであろうか、あるいは物々々と唯物説でも主張しているのであろうか」

一人間一匹
右返上申候。但し時々幽霊となつて出られ得るよう、特別御取計可被下候也。
明治三十四年月日 何がし
地水火風御中

この二つは子規がみまかる明治三十五年の前年の日記「墨汁一滴」の中にある漫筆だ。

子規の辞世の句は、前述した三句だが、生ける最後の絶句は、病中で口吟したつぎの句
枯れ尽す糸瓜の棚のつららかなであつた。

子規はそれから十数時間後にその鼓動を止めた。九月十九日のことというから、へちまの枯葉はまだ病室の窓外に残っていたことと思われる。しかし残暑のなかの「つらら」は、彼自身の死の幻覚であろう。私自身の戦場の体験からしても、真夏のさかり射りつける陽のただ中とても、死は氷室の如く冷たく厳しかったからである。

「凍るへちま」それ自身、もはや俳境もただならずというにふさわしい。子規らしい冷厳な臨終句である。



九本の胡瓜

中村九呂平

五月の末自治会長から九本の胡瓜の苗を頂いた。茶を植える用地にしていたが、折角のご厚意を有難く受けて、陽当りの良い庭の一坪をこれにあてた。紙袋を覆い大事に育てた。一周余の竹垣を作つて延びるのを楽しみに油粕も適当に撒布した。日を重ねるにつれ夢もたくましく葉も掌大の濃き緑を増し、一日に、何回となく庭に出て、盛んなこの姿を見て独りほくそ笑んだ。吾が子を育てるように来る日来る日が実に楽しみだつた。

あれから凡そ二カ月が過ぎた七月四日最初の収穫の鉢を入れた。当日は一本だったが、一尺三寸もの大物だった。神前にお供えし會長にもお見せして出来栄を賞され悦に入った。八月の一日までの収穫実に四十七本、当地七月中、下旬は降雨なく野菜も高価に及び七寸位のもので十円から十二円程度で市販されていた。

吾家の作はどう低価にみ積つても一本十五円から二十円の代物現

在までに換算すると約七百四、五十円もの胡瓜を得たことになる。

贈も美味かった、糖みを漬けは大好物、しかし十一号台風で可成り痛めつけられ下葉枯れ落ちいたましくさえ思える。それでも今日も又黄色花を咲かせているが実のるまで母体を持つまい、十本ばかり尺足らずがぶら下っているが、おそらくそれ等が刈り終いになるだろう、近く引き上げねばなるまいが可愛想でもある。

来年は花壇少し減らして胡瓜を二倍位植えて見たいと思つている。それまでに研究を積んで以上の実績収穫に心はずませる。

続・川柳書架

(58)

田中五呂八遺句集

水原社同人編

★本句集の巻首に、木村半文銭氏渡辺尺蠲氏、甲野狂水氏の序文がある。

★本句集は故田中五呂八の主筆していた「米原」に発表された作品だけ採録されている。

★昭和十三年一月五日発行。B6版、一〇三頁。定価壹円。発行者小樽市花園町二丁目廿六番地田中尚子、発行所小樽市花園町西二丁目廿六番地川柳水原社。

★著者は川柳革新運動の第一人者として知らる。明治二十八年九月

二十日御路市に生れ、昭和十二年二月十日に歿した。

現代川柳著名作家随筆集

家随筆集

★本書は速水真珠洞氏還暦記念に刊行されたもの。本書の扉に「泉」と別名が附されてある。

★「泉」目次一清冽(川柳) 天皇を迎えて(麻生路郎)、節電(井上信子)、時代(大谷五花村)、明月(川上三太郎)、駅前(岸本水府)、唐辛子(木村半文銭)、我家(稻元紋太)、母の顔(西島〇丸)、女郎花(速水真珠洞)、人生の苦(富士野鞍馬) 原稿紙(前田雀郎)、句三昧(村田周魚)、象の眼(和田黙然人) 銷釘(大島濤明)

一碧潭(随筆) 船上(速水真珠洞)、剣花坊と久良伎(麻生路郎)、火鉢の屑(大谷五花村)、川柳女の一生(川上三太郎)、褒貶の貶(岸本水府) コットウ三昧(木村半文銭)、川柳家は選ばれた人である(西島〇丸)、川柳第二芸術論(前田雀郎)、温故知新(山路閑古) 眼鏡を新たに(稻元紋太) 還暦と赤色(富士野鞍馬)、山色新たなり(村田周魚)、思い出の旅(井上信子)

一奔流(川柳) 真珠洞句帖に拾ふ

「泉」は以上で終り、次に還暦編の目次があるが、これは省略することとした。

★昭和二十三年二月十五日発行。B6判二五三頁、非売品。編輯者大神哲次、発行者福岡市竹若町又八番地速水晋次郎。

★編輯者、発行者ともに故人。 自選句集

川柳

こけし川柳社編

★清水美江氏以下五十八氏の自選句集である。

★昭和三十五年十一月十日発行。B6版、八五頁。山形県天竜市駅前、こけし川柳社発行。

★大島濤明氏谷太刀良氏等も見える。故人では船木夢考。

現代柳人録

(一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号 (四) 現住所 (五) 生年月日 (六) 出生地 (七) 職業 (八) 電話 (九) 自信の句一句 (一〇) 川柳以外の趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二) 川柳に手を染めた年月

(273) 横山青果
—— 横山増美 (一) 青果 (三) —— (四) 高知市新屋敷六〇(五) 明治三十七年一月三日 (六) 高知県土佐佐町 (七) 青果物卸業 (八) 高知②七二二五(九) 子を出してそれから日を数え(一〇) 味覚の探究(一一) 有(一二) 昭和三年

(274) 永田きみお
(一) 永田公雄(二) きみお(三) —— (四) 長野県須坂市太子町六六四(五) 大正十一年三月二十五日(六) 長野県須坂市上町六三(七) 公務員(八) —— (九) 滔々と多情のいばり富士に向け(一〇) 蒾・謡曲(一一) 有(一二) 昭和三十三年五月

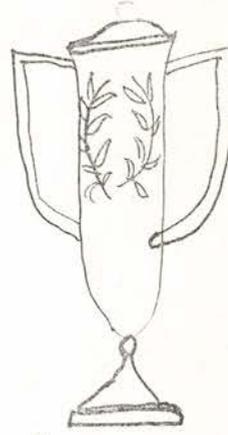
(275) 斎藤清幸
(一) 斎藤清幸(二) 清幸(三) —— (四) 大阪府河内市三島三三九ノ一(五) 大正十二年一月二十七日(六) 朝鮮或南元山府(七) 番傘編集部長(八) 四二四五(九) —— (一〇) —— (一一) 有(一二) 昭和十四年六月

(276) 中村義雄
(一) 中村義雄(二) 義雄(三) —— (四) 広島市滝町一三〇八ノ五(五) 昭和三年八月十一日(六) 広島市三滝町一三〇八ノ五(七) 材木店員(八) —— (九) 秋光る生あるもの影し(一〇) 文芸(一一) 有(一二) 昭和二十五年八月

(277) 中村義雄
(一) 中村義雄(二) 義雄(三) —— (四) 広島市滝町一三〇八ノ五(五) 昭和三年八月十一日(六) 広島市三滝町一三〇八ノ五(七) 材木店員(八) —— (九) 秋光る生あるもの影し(一〇) 文芸(一一) 有(一二) 昭和二十五年八月

柳人とスポーツ

アンケート



- ① あなたは何かの選手をされたことがありますか
- ② スポーツで面白いと思われた句を(作者名も)お知らせ願います(編集局)

柔道にボートに

大 阪 福井野迷路

(1) 選手をしたのは中学時代は柔道、大学時代はボートです。どちらもうんと力を入れるスポーツです。きばるたびに血液が血管の中で張り切ります。今日七十三才で、そろそろ脳出血の書き入れ時ですが、若い時代にスポーツで血管がきたえてあるので、いまだに闇魔さんのお目ごぼしを頂いて居ります。

(二) レスリングねじ切始のように(実)

水泳で負け水害で日本勝ち

ナイトゲーム百姓誘戯盛が欲し

柔道を正課に入れてストに入り

ボートの選手で負けた時のくやしき、勝った時のうれしさの夢を時々見ます。

一着と聞いたとたんに起こされる

身障者体育大会で

東野大八

八月中旬、県身障者体育大会が

開かれ、私が郡下の選抜出場者に選ばれた。無断でプログラムにのせられたのだが、怒っても仕方がないので出場。

ただしバスケットのボールを砲丸投げの要領で投げるだけで、コトはまことにあつけない。四位でフライパンのナベを頂戴した。好記録ならローマ大会へ行ける体育大会だそうだが、とんでもない。そんな暇はこちらにない。わざと負けたと女房にそういつて大笑いでした。

——前畑の感激静かに下駄一つ

ベルリンオリンピックで有名な前畑ガンバレの記録映画に前畑の濡れた下駄のワンカットがあった。これで涙をこぼしたのは私一人ではない。前畑さんにこの句を話したら大いに話はずんだ。前畑は岐阜の人で今はいよいよお婆さんである。

選手した事なし

岡山 服部十九平

- ① 選手をしたことありません。
- ② 重役に投手をさせてストがなし

濃物にするほど土俵塩をまき

(吾水)

トラック二百

鳥 取 河村日満

① 選手というほど自慢のできるものはありませんが、トラックで二百、八百リレーなど走っております。二百が走れるなら百は勿論走れるだろうと思われるでしょうが、百より二百の方がタイムがいいので、二百専門ということになったようです。四百も走ってみましたがありますが、これはゼニになりませんでした。

又野球は捕手をやっております。五十才の今日ではもう駄目で、市議会野球では二塁を守っているのがやっとなり現状です。

○ 恋人へあっぱれ派手なダイビング
作者名は残念ながら覚えありません。昭和はじめの頃の作品かと思っております。

四〇〇で逆一等

愛 媛 渡邊曉童

① このあいだ集団帰郷をやった日本中に知られた弓削の商船学校、広島県と愛媛県境のくつきよな地点、四十年も前付近の小学校を集めてトラック、フィールド全般の競技の上総合点第一位に優勝

旗が出るのでなかなか盛大でした。心臓の弱いのが四〇〇メートル徒走に出されて逆一等の光栄に浴したのが紅顔十六才(満十四才)の美少年時代、目下は戦城団体系リレーなんかに出され、長がつく中では若い方なので逆一等にはならずすみませす。

② 小説「坊ちゃん」の山城屋旅館(実名きどや)から二軒となり大阪時事新報支局の拙宅へ渡支の途中電話下さった森東魚先生、柳話百出の後「奉公の道は一すじ神代より」の短冊をいただきましたが、その先生の句で「川柳雑誌」の表紙に吉岡鳥平画伯が絵をかかれた次の句が忘れられませんでした。

スポーツ用語も

知らぬ

岡山 浜田久米雄

① 残念ながらスポーツの選手をしたことはなにもありません。国鉄へ入った昭和五年ごろ、半年ほどテニスに熱中したことがありましたが、胸のあたりが痛くなり、これではろくまくく肺病になってはと思い、ブツツリやめてしまいました。こんなにスポーツがさかんになって来たこのごろ各スポーツの用語や規則にわからないこと

課 題 「制 服」

麻 生 菫 乃 選

制服に惚れて私立を志し 阿茶
 制服を縫い変えてやる新入社 同
 制服よさらば試験ともさらば 同
 制服をぬがぬ先から嫁の口 同
 修道尼の黒と白とに惹かれたり 清子
 学生結婚制服のまま式を挙げ 同
 停年を守衛の服が待っている 同
 七ツ鉦あこがれた子が額の中 同
 この歌手もまた制服で売り出す気 同
 制服を愛し婦長は嫁がぬまま 同
 制服に恥じぬ日々なり空の青 同
 新米のボリスも制服ものを云い 同
 進学の制服へママ眼がうるむ 同
 姉の式学生服も行ききたがり 同
 制服のなかばで嫁いでいった友 同
 制服の頃はなつかし母もいて 同
 制服でないのに署長けむがられ 同
 制服も舞えば女のシナつくり 同
 制服につゝめば十九あどけなし 同
 制服の娘は夢のない現実派 同
 制服を着たハンサムにだまされて 同
 定年へ制服をぬぎ鋏を持ち 同
 制服で地球一週スチワデス 同
 制服の中で息子を見失い 同
 制服が一きわ処女を輝かせ 同
 冠婚葬祭制服ひとつで押通し 同
 制服を母親だけが信じきり 同
 制服の夫たのもしくたのもしく 同
 制服が好きなら遠慮する 同
 チンピラの喧嘩へ制服来て中止 同
 制服の感傷そつとはって置き 同
 制服をぬげば娘のもう女 同
 巡查する息子のお古で農耕だ 同
 制服をかざって今日は三回忌 同

次回題「下 駄」メ切十月末日

が多くまごつかされております。
 ②別にありません。

社 会 に 出 て か ら

小 根 伊 藤 茶 仏

少年時代病弱だった私は、学校を出るまで体操一つ出来なかったの、スポーツの選手どころではなかった。社会に出てから身体も良くなり、テニス、卓球、草野球等もやり短距離百米位なら十三秒の記録を覚えています。スポーツは何んでも好きですが、見るのはテレビぐらいです。東京オリンピックも長男夫婦が東京におりますので都合がつけば期間中の一日を孫でも連れて見物したいと思っています。

②ホームひよいひよいヒョイト
 ホームラン (本田柳一路)

今は故人ですがメシより野球のすきな人でした。

ハ イ ジ ャ ン プ で

八 尾 西 尾 葉

僕の旧制中学四、五年生頃は鈴木伝明、田中綱代のスポーツ映画全盛時代だった。

僕の選手としての出場はフィールドではハイジャンプで記録は一米七〇だった。トラックはローハドルで一一〇米でしたか十五秒フラットだったと記憶する。当時

は市岡の市立運動場へ、黒のランニングシャツの、胸へ白の花文字のTを大きくはって、黒の線を入れた白いパンツをはいて、スパイクの音もさくさくとウオーミングアップをするエエかっこは我ながら良き青春だった。いつも予選は軽るくパスしたが決勝のベストシックスは入ったり入らなったりした。

ハイジャンプバーの上でねてる
 よう (葉)

因みに僕の跳び方はローにオーパーだったから右のような句になる。

ワ ザ で 鳴 し た

相 撲

麻 生 路 郎

私も選手をしたことがあるので、アンケートの仲間入りをすることにした。

瘦驅鶴のような私が柔道の選手や学校代表の相撲選手だったといえば、ホンまかいなど首をかき上げる人があるかも知れない。

私の高商時代(明治末葉の話)

私は学校の柔道部員だったし、学校から帰ってから、町道場に通って、巡查などに稽古をつけに行ってやったものだ。相撲は関西学生相撲大会の第一回に学校を代表して出場したものだ。学校がプロ力士二人を招いて稽古させられた。土俵は堺市の大浜公園だった。今ほど合理的な相撲ではな

ったが、なかなか面白い相撲が見られたものだ。京都の武徳殿の選手で、柔道の捨て身で、相手を土俵の外へ投げ飛ばしたのはよいが、自分の方が早く土俵に背をつけたのか、投げられた方に軍配が上ったと云う奇抜な相撲もあった。すばらしく色白で、肉つきがよく、プロ力士をつくりという学生がいつも負けていたが、この学生の親がボスだったので、勝った選手は無事に返さぬと子分がいきまいたので、護衛つきで引揚げるという騒ぎもあった。毎年一回行われていたこの学生大会も、費用の点から三十一回で廃されてしまった。

大阪朝日のスポーツの担当記者が、柔道部をカメラに入れてくれたことがあるが、腕にリューリエーたる力コブの遺入った私が写っているのも、今ではウソのような話だ。あの時の記者は鹿児島島の桜島大爆発に現地報送で死線を越えて来たので、社会部長になったが、だいが以前に故人になった。思えば遠い昔の話だ。

②スポーツを詠んだ川柳では、
 作戦にナインは肩と肩を抱き

東 魚

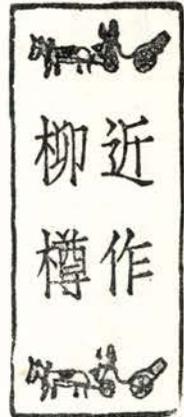
東 魚

東 魚

迷 村

路 郎

Sの字を書いてスケート板返り
 高跳びの向うに見える赤い屋根
 などがあがる、何れも大正時代の句だと思ふ。



麻生路郎選

北川春巢選

扇風機の風ほど情がなし 鳥取県 鈴木村諷子

ふた親の石ヒのかけでマツチすり 同

いかす嫁しゆうとの後妻さが して米 同

軍かんマーチ昔も今も勇ましい 同

指名犯管かつ外へ逃し合い 同

流動食の横でかにす食べて見せ 同

哀しみという葬式の派手なこと 同

はなぐすり効いたと思う得意の日 同

打ち水の夫の肩のサロンパス 高槻市 撫本 枝蝶

大輪のダリヤにも似て恋のひと 同

ストレスの解消今日はバックする 同

ポーナスは益まで待たぬ金の高 同

せめる蚊へ夫の夜勤思う蚊帳 同

義理と言う仲を忘れた子の背丈 同

子を論ず脳裏不孝を振りかえり 青森県 岩淵 一星

幸福は六十点の夫と居 同

雑巾も持たず十九の夏休み 同

風上みの美女に一瞬若返り 同

孫が入り替って益の賑やかさ 同

同業の前も開店長蛇する 同 平野 光道

敵及者慰霊祭に香水匂わせる 仙台市 同

スラム街除草剤ほしい女も居て 同

妻のミシン音定期の胸に 同

農嫌いし娘も日焼けして月見草 同

宿近くなって観光バスに目が覚め。 同

秋時雨賽銭箱は今日も空 同

清濁を併せ吞んでかよく肥り 奈良県 草深 酔升

停年も近し口だけよく廻り 同

老杉が古利を護るよう聳え 同

老人を尻目に座りガムを噛み 同

ラッシュアワー遠慮 してたら 邪魔に され 同

つきあいのよい酒又も身を削り 同 戎川 太郎

父祖伝来と都市計画をはねつける 羽曳野市 同

夕立が車窓の富士を奪い去る 同

知恵の輪の様にからんだヨガの足 同

雨具までアクセサリー にしたがしやれ 同

別居中と云う離婚の予告篇 同



柳志寸言

本多柳志

◇面は人に見せる為につけるものである。川柳は人に見せる為に作るものではない。

×

◇人は指が指紋と、ちがった川柳理論をもっている。それでいいのだ。理論の確立は川柳を固定させる心配がある。

×

◇目から鼻へぬけるのは秀才の別名である。耳から口へぬけるのはそうではない。

×

◇ミロのヴィーナスの魅力は手のない所にある。手のポジションや何をもっていたかは、観る人の想念の中においてこそ余韻がある。両手を欠いたのは作者の、芸術的演出ではないのか。

×

◇役者や歌手の幸せはその作品が後に残らぬ事である。画家や作家の不幸はその作品が後に残ることであろう。

私の作句練習と

川柳観

青山慶之助

川柳を、趣味とするように、なったのは、昨春、胃病のため入院



すぐ赤くなる青年は詩を好み	同				
筆まめな男毎朝整髪し	同				
ストッキング <small>ストッキング</small> 脱いで主婦の役	同				
団体を見送る鹿の目がやさし <small>奈良市</small>	村上 春巳				
こんな奴までがゴルフの話する	同				
一〇円の金魚おいたに耐えて生き	同				
男だつてハンドバックがほしい夏	同				
叱られた母を是とする娘の味方 <small>香川県</small>	三井 酔夢				
頂くと云はずおあずかりする中元	同				
四十路 <small>もつとくしき</small> れないサマードレス	同				
P T A 発言すれば役がつき	同				
海の日の色美しや珊瑚島 <small>宿毛市</small>	渡辺伊津志				
夜の蝶這入って踊りの輪がふくれ	同				
男らしき歩きぶりなり老婦長	同				
旧家だとかみしもの田を守り	同				
頑丈な金魚おもわず老妓にて <small>倉敷市</small>	水谷 谷水				
情操教育とや斜陽夫人の嫉妬かも	同				
とられるもの <small>ざまざま</small> とまだ喋り	同				
宅はもう飲 <small>めまん</small> のとかわつてくれ	同				
よい嫁じゃとほめた姑が <small>もど</small> なり <small>高知県</small>	山川 勝子				
サマードレス年を忘 <small>わす</small> れ派手に着る	同				
A B C も知 <small>ら</small> ずババママなど呼 <small>よ</small> び	同				
母達者庭も畑も草がない	同				
ふところとメニュー相談 <small>まとも</small> ならず <small>玉島市</small>	水粉 千翁				
口先へ三度に一度乗 <small>つ</small> てやり	同				
切り捨て、生かす年期的花鉢	同				
任かされて居る自負心がよく動き <small>パオアルト</small>	齊藤 流路				
落とされた香車みたいに能がなし	同				
あなたならわか <small>つ</small> てくれ <small>ら</small> ためられる	同				
猫として言い分があり目が光る <small>富田林市</small>	飯島 青米				
求めざるが安し猫よこになる	同				
ヘルシヤ猫ならば捨て <small>ら</small> ないものを	同				
無理矢理に免許取 <small>ら</small> した事を悔 <small>い</small> <small>堺市</small>	青山慶之助				
顔自信なくてやたらと肌を出し	同				
金出して飲まぬがタダの酒強し	同				
ジェスチャーの過剰不快の気が尖り <small>岡山県</small>	阿部 良江				
愛人にされて気楽な釣の竿	同				
呑んだときだ度胸とみくびられ	同				
両隣り立退かぬからうちも居る <small>大阪市</small>	稲本 凡子				
私と私心の中で演技する	同				
愛してるからこそ許してやれぬ嘘	同				
キリストの葬儀に村は目を見張り <small>兵庫県</small>	齊藤たけお				
電話架設暑中見舞をタント出し	同				
お悔みの上手節付けて言うて去に	同				
労働歌唄うと月給また上 <small>が</small> り <small>大阪市</small>	山田 李鳥				
B G が来てオフィスが明るなり	同				

と教えられました。この世間の荒波に立ち向かう小舟一艘よほどの忍耐力と辛抱心がなければ、時には波にのまれ目的地には着岸出来ません。

川柳も全没した時の苦しみ、又情けない事をよく味わい、次の句会には必ず見ておれ、とファイトを燃やす心になれたのも、川柳のおかげであり、それによって、人生の荒波に立ち向かう心構えが少しずつ、教えられました時、私は只、川柳を趣味や道楽に終わらせず常に川柳と生活、又川柳と人間関係とを結びつけ、いのちある句を創りたいと念願致しております。

私は、仕事が内仕事の関係なので社会と申すものも本当に分からず世間の見悪い面も知りませんでした。が、川柳をやらせて頂くようになってから、あらゆるものを、又、見聞するものを川柳に結びつけるため、自然、雑吟が多弁になります。今年三月の大万川柳大会で天位を頂戴致しました句に「ピクターの犬もかしげるヒット曲」の句は、ラジオで聞いた漫才からヒントを得た句であります。大会二日程前にラジオで漫才の放送をしており男女のコンビでしたが、女の人が

「東京の夜は笑ってる」の歌を歌えば男の人が

「夜が笑うのか、近頃の歌謡曲は、わけの分からん歌が多すぎる、先日レコード店に行けば解説に困る歌ばかり鳴らすので



五世川柳 その句 (二)

阿達義雄

遊女が紋日前に特に金に苦しんでいたことは、

○もの狂はしく候ぞ紋日前

(九六・27)

○雪の頭痛でかんざしもまげんした

(一一三・18)

などの句によっても知られるが、後の句は、或はこれも無心の前提の手管かも知れず、馴染客の心を捉えるために手紙の文句の泣き落としに、或は又小指を切ったり、並々ならぬ苦心であったであろう。

○来た顔は文のうらみの十分の一

(七四・11)

○いい夜具でざんすが指が痛クおす

(一二五・9)

○新造の無心一く指を折り

(六六・4)

この新造は突出し新造であるから「指をおり」は足の指を折ることで、自然的現象であったが、一つには客を喜ばせるテクニックでもあった。その癖に、流行る時は、自分の代りに名代の妓を当てがって、遊客をさんざん怒らせたりするのであった。

○かた腹痛し名代も癪ざんす

(一〇〇・148)

○ますく立服名代の高軒

(一一八・4)

遊客はこの怒りを、行燈の油注ぎに来た喜助に爆発させ、喜助も自分の知らぬことながら、余儀なく平蜘蛛のようになって詫びる有様を、

○喜助畳へ頭を摺って御助弁

(一一四・24)

○松葉に半蔵松の名に長大夫

(一一八・31)

名は詠み込まれていないにせよ、太夫又は上妓のことを言っているものは、

○如菩薩の米迎花の降る夜也

(七二・22)

○翠某書画手鍋にまさる苦の多さ

(一〇七・36)

○根引した松高砂の氣にいらす

(七二・22)

○二間持ってもないものは糶粉瓶

(七二・18)

禿を詠み込んだ句は、

○三千の内に両袖付も有り

(一〇八・11)

○灯は眠り禿は夢で時鳥

(一一九・24)

○追くゝに禿が告げる窓の雪

(一三三・31)

○平服の禿すこぶる天窓勝

(一五四・44)

(四) 遊里吟 遊女・廓者

佃の遊里吟に見られる人物について調べてみると、親のために苦海に身を沈めたものとして、

○田も畑も水にとられて流れの身

(八二・20)

○山吹となつて娘は親を生け

(七五・31)

又、亡き父母の命日を精進日として供養をしている遊女を、

○無き父母を簞笥から出す精進日

(七八・22)

右のように写している。

華魁の名には、三浦屋の高尾・小紫、岡本屋の長大夫が見え、

○高尾の失礼三浦屋は度々詠る

(一一八・38)

○細見の高が武鑑の高をふり

(九〇・17)

○他所になし其色かへぬ小紫

(一〇七・23)

○蹲居して喜助ひたすら御記

(二四二・8)

このような遊女の年明け又は身請けのこ
と詠んだ佃の句には次のようなものが見え
る。

○天孝心を捨てずして請け出され

(七二・24)

○名とげて退き似合いすか後ろ帯

(一五七・5)

○歳は三九で履き初めるこの文

(一三四・32)

○二十才で年が明け、初めて足袋をはく

○そひとげて小指ばかりはチト不足

(八一・23)

○昔夢珠数持つ指が四本半

(一〇六・41)

尤も、次の芸者の句は、地味な世帯持ち
のことを詠んだものである。

○世を捨てた如くに芸者世帯持ち

(一一九・8)

佃は、以上の外に、深川佃新地の婢婿た
る二百文の家鴨や最下級の二十四文の夜鷹
のことも句にしており、

○家鴨住む所も泥の流れ也

(一五一・42)

○あひるさえ鳶風の張りを持ち

(七二・26)

○それ鷹をとらへぎうくでている

(七八・14)

○夫婦別あり鷹と成りぎうと成り

(八二・11)

右の「ぎう」は客引きの所謂妓夫である。

次に算術的な句として知られている句、
○客二つ潰して夜鷹三つ喰ひ

(一一二・12)

これも佃の作であり玉代二十四文の夜鷹が
客二人分の、玉代を出して、十六文の夜鷹
そばを三つ食べたというのである。

(五) その他の遊里吟

最後に、遊里吟として残っている重なる
ものを並べて略注を附して見た。

○見世へお通り候へと鈴の音

(七五・28)

○鈴の音を合図として、遊女は見

世を張る。候文の文句で滑稽化。

○通ふ神目つけてあふれる山の神

(七五・2)

○遊女が客に送る文の封じ目に

「通ふ神」と書く習慣があった。

○「通ふ神」と「山の神」との対照

○来べからぬ宵げちくがぶら下り

(一〇一・37)

○蜘蛛の下るのは、客の来る前兆
だが、げちくでは、

○我が心なぐさめかねる紋日前

(七八・13)

○紋目を済ますためには相当の費
用を要し、それは馴染客の誰かか
ら出して貰わなければならない、

○かんざしの足くたびれる紋日前

(六五・29)

○待ち人が来るか来ないか屢々畳
算で占うので、簀の足がくたびれる。
簀を投げて、その落ちた所から

畳の編目の端の所迄数え、奇数

か偶数かによって吉凶を占うのが
畳算。

○来たり喜の字屋簀で賤が嶽

(七四・31)

○喜の字屋の持って来た台の物の
料理を、遊女達があちらこちらから
簀でつついて食い荒らす様。

○遊女も下女も二十五の内に見え

(八九・19)

○江口の遊女は普賢菩薩の化身と
され、江戸佐久間町の下女お竹は
大日如來の権化と言われている。

二十五菩薩。

○ぬれたのをさらして乞食仕立にし

(九二・3)

○心中未遂で、晒し物にされた
上、非人に落とされたことであら
う。

○市の翌親父隣の聲をほめ

(七四・3)

○息子は浅草の歳の市から吉原へ
それたのに、隣の聲は然らず。

○嫁びたなりでおいらんの母で候

(九〇・40)

○田舎から華魁の母が娘に逢いに
来たこと。

○お流しなんし今に湯が出来んすに

(九二・38)

○遊客に入湯をすすめていゝ華魁
の言葉と思われるがどのような場
合か？

(六) 佃の俚諺利用の句

○佃が佃諺の文句を取り込んで作ったと思
われる狂句を列挙してみると次のようにな
る。

○虫壳は上手の手から火をもらし

○転ばぬ先に杖にする子を仕込み

(七一・2)

○良菜となる忠臣はにがい顔

(七四・30)

○後添は六百安い子に困り

(七五・4)

○「祖母育ちは三百安」、三百文
の倍も安い子に困る。

(八九・40)

○初卵がへりのかうべにも神やどり

(九四・15)

○神のすべるは正直のはげあたま

(九八・68)

○目の上の瘤で松前軒続き

(一〇一・13)

○短慮功をなさず摺鉢みちん

(一〇二・31)

○物喰へば唇痛しのほせ性

(一〇四・7)

○師の影は七丈さがれ七ツ過ぎ

(一一二・8)

同日即吟

○正直な人は通らぬ梨下瓜畑

(一一四・20)

○神主は人のあたまの蠅を追ひ

(一二一・9)

○馬かたの耳には風の非修非学

(一二七・83)

○追風にてんまはおんぶして出かけ

(一五一・28)

○三千両は後悔を先へたて

(一六二・8)

○平重盛、育王山へ布施、
——筆者・新潟大学教授



人生譜

河野春三選

半分以上女 影を見つめて
風まとも涙をふいていた自律
ゴシゴシゴシ仮面を洗っていた紳士

香川県 三井 醉夢

四面楚歌ビエロ悲しく笛を吹き

遠い花火犬が私の影を踏む

美しき嘘ゴム風船の手を離し

馬鹿づらのわたし貞女の碑を刻み

愛憎を知って水蓮花開く

大阪市 早川 清生

日の丸の立ってる下が税務署だ

ニッポン中エバラック ニッポン中テレビ

西芳寺 苔育てるが業ごうとなる

島にあるのは愛慾と岩ばかり

出稼ぎに背灼けし記憶 きりぎりす

兵庫県 常岡 孝風

台風の目に似し男気が弱い

コーヒーの底に獣心静か秘め

回転木馬化石の夫婦いこう午後

肖像の影がみにくい裏話

偽善者の灯に紳士淑女の貌がある

今治市 月原 宵明

姫路市 時実 新子

ぶどう棚の昏さに庇う終止符の刻

愛のピリオド尖塔は今日もまっすぐ

風やりすこす 蟹のようにも

蹄カボカボ この坂道も家族につづく

いっほんの樹の終焉に 旗振る蟻ら

踊る輪の踊る男の足を見ていた

体温は三十九度 まなぞこの餓鬼

看板のおんな朝まで笑うのか

羽曳野市 戎 川 太郎

残り火を夜空の花と散らせたい

訣別の海は真白に糸をひく

虚飾を重ねて白は戻らない

入道雲の下 健康体の蒔きぬ

鴉夕焼に乱舞するとき哭こう

土塊つちくわよ生きると轆轤踏む人が

青春を語るるとき丘に登ろうよ

西宮市 樋口 舟遊

煩惱へ蟬の抜け殻持っている

握手している権力と夜と金と

権力の河に汚水の流れこむ

無愛想な金だよ蟻の列くすす

別荘のソフワーに一人狼が寝る

乳房ぐみぐみ狐人日記一枚やぶる

大阪市 瀬古 南紀郎

遠吠えを聞き居り日本憂うる夜

またもとの顔に戻って昼の笛

神妙に服用のうみ出してからもろかった

扇風機の風断って死んでゆき

インチキが系図の中に一人居り

熱帯魚別居の窓の陽を泳ぐ

大阪市 島田 雄峰

人間の中の自分を忘れかけ

一房のぶどうそんなに父なき子



けだもののひしめき合いて水が無し
明日の水思わず愛の極りなし
灯を消して五眠の位置はたしかなり
忘れかけたもの母校のポプラ蘇らす

羽曳野市谷 一 征

炎昼の沈黙蟬だけが生きている
ガス麻酔奈落を一目見て帰る
他人の血をもらって奈落をかけ昇る

玉島市 水粉 千翁

何も彼も男挙にして震い

真実の道の踏まれた日も染し

身の上を聞かれておんな身構える

札幌市 松田 半月

風船のフワリ人生さかに見え

七夕の星またたいて人生さる

ゼンマイを巻いても手応えない古さ

鳥取県 鈴木 村諷子

たかが枸杞 誰かは不老願わざる

慾張りが死んでしまっておかしけれ

新居浜市 賀本 昇

反抗期ですと妻も取合わず

羽咋市 三宅 ろ亭

財あれば言うこと多く用いられ

宿毛市 渡辺 伊津志

夏菊に疑問を投げる子をあやし

京都市 室井 八九寸

みんな行くから僕も行くピカン

神戸市 吉田 隆史

こうなったからはと其の夜の国訛り

松江市 柳 楽鶴丸

僕の血も黄色くなっているだろか

仙台市 平野 光道

血を吸った蚊を止めたる手を見せる

大阪市 西本 保夫

連絡船テープ悔恨まだわかず

倉吉市 奥谷 弘朗

目的に向うファイトも消えかかり

七尾市 松高 秀峰

悪銭に負けて人間的な人

金沢市 根上 杏花

墓の前Aも真面目に手を合せ

玉島市 井上 清心

落書の壁陽だまりの老夫婦

東野大八著

風流 人間横丁

B6型 二五八頁
価二五〇円
送費七〇円

★異常な競争にまき込まれ隻手となって帰還した著者のザックパランな人生批判が、その雄筆からはとばしるさまは凄く、まるで腕の冴えた板場の切れ味にも似ている。★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

橋高薫風子著 麻生路郎序

川柳

句集



価二五〇円
送費六〇円

▼著者は新進作家で、繊細な新感覚の持ち主である。川柳不朽洞会に入って採まれ、川柳編集部員として精進を続けている前途ある好作家である。

大阪市住吉局区内万代西五丁目二五

発行所 川柳雑誌社

振替口座 大阪 七五〇五〇
電話大阪 六〇八一

川柳にあらわれた成人病 (上)



No. 1.

若林草右

九月十日の老人の日には各地の敬老会や老人ホームで、老人を慰め、いたわる数々の会が催されたようであるが、これに因んで、私も老人の一人として老人病（今では成人病という名が主につかわれている）に関する川柳を中心に二三申上げてみたいと思う。

「川柳と病氣」については本誌第四二六号、四二七号、四二九号、及び四三〇号にわたり、大先輩の北川春巢医博が発表され、病氣の詳しい解説から、句の味い方まで、いろいろ述べられているので、ここには重複をさけて、同氏の発表された後の、昭和三七年、三八年及び三九年前半期の川柳塔から成人病に関する句を頂くことにする。

成人病というのは数年前から厚生省が使用し始めたもので、二配の方にはピンと来ない懐があるかもしれないが、一言にしていえば昔から使い慣れていた老人病というのと大した差はない。この成人というの、毎年一月十五日に行われている成人式の成人には全く別の意味であって、中年以後の年齢層をさしているのである。成人病の定義についてははっきりしたものは見当たらないが、厚生省では「老化現象に伴った一連の健康異常」というように解している。「人は血管とともに年をとる」といわれているが、老人になると好

むと好まないとかかわらず動脈は硬化して来る。血管は栄養分を補給して新陳代謝を盛んにし、また老廃物を除出して、各組織や臓器の機能を正常に運営するための大切な鉄道幹線である。従ってこの輸送路が故障をおこすと、色々な変動が体に起ってくる。これが老化現象である。すなわち成人病の中心は血管ということができる。厚生省ではこの他に、悪性腫瘍すなわち癌をこれに加えている。癌は四〇才以後のいわゆる中年令以後に発生することが多いから、一応成人病としても不思議はないが、二〇才台、一〇才台の癌も稀ではない。極端な場合には赤坊にも発見されている。即ち成人病の定義から少しはずれているという人もあるが、現在は便宜上癌も成人に加えている。

最近の死因別統計で、第一位を占めるものは、中枢神経系の血管障害、すなわち、脳出血及脳軟化であって、二四・六%にあたる。第二位は癌であって一五・一%、第三位は心臓病で二〇・〇%を示している。しかも冠状動脈障害による心筋梗塞症のような重篤な心臓病は断然老人に多い。これらの病氣は「たん発病」と生命を奪われ、或は生ける屍と

なって、あったら老年の秘をだいなしにする病氣であるから、これを発見し、予防するために、その「きざし」の見える中年層にさかのぼらねばならない。このためには老人病というよりも成人病とした方がやり易い。また一般の印象も老人病というよほよほの老人を聯想し、成人病という、働き盛りの壮年を想像して好感がもてるため健康診断を受ける人も多くと考えられる。

私はここに老人という言葉を使ったが、老人とは何才からかという、これは中々むづかしい問題である。昔は四〇才を初老といひ息子に世帯を譲って、楽隠居し、六〇才は還暦で赤いチャンチャンコを着て立派な老人になりましたものだが、これはあくまでも暦年上の老人であって、中には要領として壮者を凌ぐ人も少なかった。平均寿命が男は六七才、女は七二才となった現在においては、暦年令はますます老人の規準にはならなくなった。

世に仙崖和尚の作と伝えられる老人六歌撰というのがある。歌がよるほろろが出来る歯が抜ける
頭が禿げるひげ白くなる
手はふるふ足はよろめく腰曲る
耳は聞こえず目はうすくなる
身に添ふは頭巾襟巻杖眼鏡
たんば仙癩尿撒孫の手

聞きたがる死にともながる淋しがる
出しゃばりたがる世話嫌きたがる
くどくなる気短くなる愚痴になる
心がひがむ懲深くなる
又しても同じ話に子を褒むる
達者自慢に人がいやがる
老人の外観に現われた老化現象から、老人の性格、日常生活の必需品に至るまで描写して余すところがない。無病息災で達者自慢をするのも老化現象の一といわれては苦笑する人もあろう。

さて本題にかえて前述の期間に川柳塔に発表された医学関係の句は総数二六五句の多きにのぼっている。そのうち老人を取材したものが二六句ある。老人の壮者をしのご元氣なさまを称えた句もあるが、老人六歌撰の老化現象を詠みこんだ句も多い。老人のさびしさ、あじきなさを描写しながら、じめじめした感じがなく、限りないユーモアが拵みとれるのは川柳のみが持つ味といえる。
還暦に髪黒々と夢多く 圭井堂
歯も耳も達者老らくそわそわし
ほめることなく白髪のないをほめ
小石
これらの句には老人が元気で壯者を凌ぐ模様が窺われる。
老眼で入れ歯でしかもはしませ

で 没食子

老眼で入歯をしていてもあの方
は青春時代に劣らぬことを示して
面白い。入歯や老眼や難聴の句も
多い。老人に多い咳や喘息や腰痛
や無精髭をとり入れたものもある。
顔じゆうを皺にして一本の歯を
たより

湖山

これしきの餅に入歯を持ってか
れ

柳葉

総入歯昔の味がなつかしい
が

東岸

初老哀れ眼鏡を外す人かける人
補聴器の母と文楽観て帰る

七面山

長距離へ老化の耳を押しあてる
千容

アート

われながら年寄りじみた咳をし
て

晃男

老らくの恋へぜんそく邪魔をす
る

柳葉

無精髭気にせぬ程に老化せり
徐福の昔から不老不死の葉は人
類の宿望であるが、マムシ酒や、
ニンニク酒はもう古くさく、クコ
や、ロイヤル・ゼリーを詠んだ句
があった。パロチンの句は見当ら
なかった。

け 恵三朗

クコまで飲んで女の機嫌と
一編

クコの若葉は、ひたし物、クコ
飯、ゴマアエ等にして食用にし、
乾燥してお茶のかわりに健康増進
剤として、又果実はアルコール漬
にして強壯剤として昔から用いら
れたが、流行は繰返す。これもリ
バイバル・ブームか。

生薑

老化防止蜂の餌まで取り上げる

ローマ法王ピオ十二世の雞症が
女王蜂の幼虫の食糧である蜂蜜中
のゼリ様物質で癒ったというクロ
ード・エリー教授の報告から、名
もロイヤル・ゼリーとして不老長
寿の薬としてセンセイションをま
き起した。女王蜂は普通の働蜂が
数カ月より生存しないのに四、五
年の長寿を保ち、産卵を続けるこ
と、ソ連で一〇〇才以上の長寿者
の多くは飼蜂家であるということ
が法王の病氣快癒とともに、その
裏付けとなっているらしいが、学
問的根拠は今のところ明らかでな
い。

結方

結方和三郎教授創製の耳下腺ホ
ルモン・パロチンは老人仲間て愛
用されているが、句にとりあげら
れたものはなかった。

成人病

成人病そのものズバリの句は案
外少く左の二句より見つけられな
かった。

成人病

成人病いつまで生きる肌を脱ぎ
つた。

成人病

成人病いつまで生きる肌を脱ぎ
つた。

成人病

成人病いつまで生きる肌を脱ぎ
つた。

久米雄

またしても成人病のことにふれ
同

次に成人病の中心である血圧の
句が一九句ある。句の中では血圧
として高血圧を表現しているのが
多い。高血圧というのは医学の方
でいえば一つの症状である。高血
圧を起す多くの病氣の中から、
原因の明かなもの、例えば腎臓病
や、心臓病や、内分泌疾患などで
血圧の高くなったものを除いた残
りの高血圧、いかえれば原因の
はっきりしないものを本態性高血
圧症といって症の字をつけて、独
立疾患として取扱っている。これ
は最も多い高血圧をおこす疾患で
あって、本態性というもつともら
しい形容詞がついているが、これ
は原因が判らなないという意味で
ある。従って検査法が精確になれ
ばなる程少くなる運命にある。句
に読まれた血圧、または高血圧は
この本態性高血圧症であろう。

本態性

本態性高血圧症は文化と比例し
て増加しているが、初めは精神的
刺戟が末梢の細動脈を収縮させ血
圧を高める。そのうち血圧の高い
状態が続くと、動脈硬化を起こ
し、殊に腎臓の細い動脈が硬化し
て、血行障害を来たすと、血圧を
高める昇圧物質といわれるものが
分泌され持続的の血圧上昇を起こ
すといわれている。

血圧

血圧を言うて仲間一人減り

多久志

血圧を気にしながらもまだ怒り
弘道

株価また下り血圧また上り
宏方

栄養が敵血圧又あがり
花梢

木の芽立ちなどと血圧こわがら
久米雄

家建てたとたん血圧上りだし
春葉

初孫が出来血圧も気にならず
佐保蘭

退職のその後は血圧など言わず
久米雄

血圧は終始動揺しているもので
精神肉体の刺戟過労は上昇的に、
平静安眠は下降的に動く。患者の
中には診察室に入ると来ると血圧
の高くなるのがある。血圧を数
回、二三分の間隔で測ると第一
回目も最も高く、その後漸次下降
して一定の値に留る。これは血圧
測定そのものがストレスとなって
精神的の平静がかき乱されている
ためである。従って精確に血圧を
計るためにはベットに静臥二〇分
三〇分を撰ぶべきであるといわ
れている。又体位が血圧に影響を
与える。仰臥位が最も高く座位、
立位とだんだん低くなるから、測
定時の体位を記録することになっ
ている

第一句は同病相憐れむ血圧仲間
が一人減って、やがてこの次は自

分の番であるという危惧から、第
二句は怒りという精神の乱れ、第
三句は株価の暴落がストレスとな
って血圧が上がったのである。一般
に血圧の高い人には負けず嫌いで、
短気で、いつもイライラして
いる人が多いといわれている。

第四句の栄養は肥満の意に用い
られたもので中年以後の肥満は高
血圧や糖尿病になり易いといわれ
ている。木の芽立ちの句は、木の
芽立ちそのものよりもこわがらす
ことの方が罪が深い。血圧は一般
に冬期の方が高く、暖かくなると
下る場合が多いものである。家建
てた句は借金で建てたのでその支
払いのための血圧上昇か。初孫と
退職の句は環境の大きな変化によ
り血圧を忘れてしまったので却っ
て好結果をもたらさずであろう。

分の番であるという危惧から、第
二句は怒りという精神の乱れ、第
三句は株価の暴落がストレスとな
って血圧が上がったのである。一般
に血圧の高い人には負けず嫌いで、
短気で、いつもイライラして
いる人が多いといわれている。

第四句の栄養は肥満の意に用い
られたもので中年以後の肥満は高
血圧や糖尿病になり易いといわれ
ている。木の芽立ちの句は、木の
芽立ちそのものよりもこわがらす
ことの方が罪が深い。血圧は一般
に冬期の方が高く、暖かくなると
下る場合が多いものである。家建
てた句は借金で建てたのでその支
払いのための血圧上昇か。初孫と
退職の句は環境の大きな変化によ
り血圧を忘れてしまったので却っ
て好結果をもたらさずであろう。

分の番であるという危惧から、第
二句は怒りという精神の乱れ、第
三句は株価の暴落がストレスとな
って血圧が上がったのである。一般
に血圧の高い人には負けず嫌いで、
短気で、いつもイライラして
いる人が多いといわれている。

第四句の栄養は肥満の意に用い
られたもので中年以後の肥満は高
血圧や糖尿病になり易いといわれ
ている。木の芽立ちの句は、木の
芽立ちそのものよりもこわがらす
ことの方が罪が深い。血圧は一般
に冬期の方が高く、暖かくなると
下る場合が多いものである。家建
てた句は借金で建てたのでその支
払いのための血圧上昇か。初孫と
退職の句は環境の大きな変化によ
り血圧を忘れてしまったので却っ
て好結果をもたらさずであろう。

分の番であるという危惧から、第
二句は怒りという精神の乱れ、第
三句は株価の暴落がストレスとな
って血圧が上がったのである。一般
に血圧の高い人には負けず嫌いで、
短気で、いつもイライラして
いる人が多いといわれている。

第四句の栄養は肥満の意に用い
られたもので中年以後の肥満は高
血圧や糖尿病になり易いといわれ
ている。木の芽立ちの句は、木の
芽立ちそのものよりもこわがらす
ことの方が罪が深い。血圧は一般
に冬期の方が高く、暖かくなると
下る場合が多いものである。家建
てた句は借金で建てたのでその支
払いのための血圧上昇か。初孫と
退職の句は環境の大きな変化によ
り血圧を忘れてしまったので却っ
て好結果をもたらさずであろう。

分の番であるという危惧から、第
二句は怒りという精神の乱れ、第
三句は株価の暴落がストレスとな
って血圧が上がったのである。一般
に血圧の高い人には負けず嫌いで、
短気で、いつもイライラして
いる人が多いといわれている。

第四句の栄養は肥満の意に用い
られたもので中年以後の肥満は高
血圧や糖尿病になり易いといわれ
ている。木の芽立ちの句は、木の
芽立ちそのものよりもこわがらす
ことの方が罪が深い。血圧は一般
に冬期の方が高く、暖かくなると
下る場合が多いものである。家建
てた句は借金で建てたのでその支
払いのための血圧上昇か。初孫と
退職の句は環境の大きな変化によ
り血圧を忘れてしまったので却っ
て好結果をもたらさずであろう。

肩こり・神経痛
筋肉痛・腰痛
疲れ目・便秘
●アリナミン
●無臭性アリナミンF

活性持続型ビタミン

疲れ！アリナミン



宝井其角

古俳句と古川柳 (三)

富士野鞍馬

や」に因んで、 (一一二一四)

夕立や十二字足すと降って来る (二二二六)

きつい事いい天気だに夕立や (二二二二)

夕立や雷りさまはすち向ふ (九七三)

夕立ややぶれかぶれの青い傘 (九三三)

夕立のあす観音の御えん日 (二二三九)

夕立の雨に翁もはだしなり (九七四)

夕立にみめぐり牛のせをわける (二二三八)

夕立の句にあやまった稻荷様 (拾四)

夕立の一句いなりもはだしなり (二〇三六)

上五文字読む間に空はかき曇り (一六五三)

などと詠んでいる。またその十七文字を、 (一八九五)

いろはをたった十七字よせてふらせ (管初五)

十七里四方へ少し通り雨 (傍四六)

十七里四方は雨をばらつかせ (四五一九)

十七で稻をばらませ名を残し (二七四)

十七でしっぽり濡れる向島 (二〇九八)

五七五で隅田の鳥居の丸洗い (二六三〇)

などと詠み、 (七〇四)

十七と三十一で名をふらし (一五四〇)

男十七女は三十一 (三五五六)

四十八文字で京都も江戸も降り (二一九)

三冊の雨は小町を十四ひき (四四三六)

十徳と十二ひとへでいいしめり (一四三三)

雨乞は衣十徳緋袴 (九八二〇)

能因も小町もはだし隅田の雨 (一九九五)

小野小町は京都神楽苑で、能因法師は三島明神で、いずれも雨乞いの歌を詠んだ。それと並べても詠まれている。

句をほめるように蛙はなき出し (コリ三七)

大手柄本所中の蛙なく (三三三)

雨蛙直ぐに其角が脇をつけ (二六三〇)

と蛙も唱和したであろうと作られている。この慈雨は農民をよくこばせ、豊作となったので、

金の降る雨に宝の井からわき (三三三三)

人の田へ水を引かせたのは其角 (二六三〇)

ちっとべえ何かいはしたらばふ

の隣は有各な儒者狷生祖来の住居であったという。それをまた川柳は、

隣から薫る祖来の梅の花 (一一一六八)

風の来る度に隣の梅をほめ (一一九六)

と詠んでいる。しかし山東京伝は「其角は宝永四年に死んでいる。祖来は宝永六年まで柳沢家内に住居していたのだから、この隣はおかしい。梅が香やの句も後人の作ではないか。」と「奇跡考」に書いている。

元禄六年(一六九三)六月二十八日其角は、豊岸島の白雲という老人と共に、三冊へ遊びに行った。その夏は大旱であったので、農民が雨乞いのまつりをしていた。そこで白雲は、農民共に其角を指し「この人は日本俳諧の達人である。むかし小町、能因などの雨乞をしたためしもあるれば、この人を

宝井其角は、旧姓榎下(えのもと)寛文元年辛丑(一六六一)江戸堀江町の生れ、蕉門随一の高弟で江戸座を興した。自著「五元集」の序に「延宝のはじめ桃青門に入しより、宝永の万々歳をよぶといへることがきしかなり」と書いてあるから、十五歳の頃から芭蕉の門に入ったことになる。この「五元集」に

夏の月蚊を疵にして五百兩

がある。それを川柳は、

蚊がないと其角千両まではつけ (二二二三)

きずものにひどい値段を其角つけ (二四三六)

と詠み、これからの句は「春宵一刻値千金」に対して夏を洒落た作である。

梅が香や隣は狷生惣右衛門

たのんで雨ごいしたら、その応えはあるだろう」といったので、農民共は其角にせひとたのんだ。其角はやむを得ず、

夕立や田をみめぐりの神ならば (二二三九)

と書いて三冊稻荷社に奉納した。(墨水滴夏録)この時其角は三十三歳ということになる。そうすると忽ち雨が降ったというのである。この句がユタカの折句になっているので、

なあるほどゆたかと指を三本折り (一三八八)

十四文字添えて豊かな年にする (五三三〇)

宝井の水は豊かな国にみち (九一三)

宝井の水でゆたかな年に成り (六一二三)

三冊の雨はゆたかの折句なり (五二九)

と川柳に詠まれ、上五の「夕立

其角は、茅場町に住んで居て、そ

其角

其角

(三一九一) 二

宝井の水で鳥居の丸あらひ

(七四二〇)

きついこと笠木も見えぬ程に降

(三三三十一)

宗匠へ養よ笠よと土手の雨

(一四三〇)

名句だとほめからかさにごまる

(安六松2)

宝井の名句で養や笠が出る

(三七二四)

其角の句宿なし斗り悪く言ひ

(八二二五)

わるい口きいて其角は雨にぬれ

(二二二九)

其角とは知らず翁もええ雨だ

(一四三二五)

からかさのかし手の多いのは其

角

其角がほまれ鳥居まで丸洗い

(二二二四)

疵にした蚊も押流す名句なり

(六三二一)

などとはめたたえている。

其角さんごらん日傘がはなれた

よ

晋子の一句絹張りを取込せ

(七四二六)

梅よ于瓜よと中の郷大騒ぎ

(一五六一)

日傘の人も、張り物も、中の郷

の青物市場も、今戸の瓦師も、こ

のにわか雨にあわてたであらう。

椎の木は本所松浦邸の 大木であ

る。「晋子」は其角の別号であつ

た。そこで米価も下っただろう

と、

一ト雨でたちまち八九升下げる

(五四二〇)

歌はうちまき発句では米をさげ

(二〇八)

と作られ「うちまき」は御所詞の

米で、小町の雨乞いである。

この三囲稲荷は、越後屋三井の

信仰厚く、それが知られていたの

で、

越後屋の稲荷を其角しやくるな

(二二二七)

越後屋の稲荷を其角はじしめる

(一八三一)

越後屋はみんな其角がひいき也

(安六智1)

かさをかす家の稲荷で雨がふり

(二五二)

三囲の雨以後傘をかし初め

(三三二九)

とも詠まれ、越後屋では、にわか

雨に傘を貸したことも有名であつ

た。

そうして其角は各所でほめたた

短冊を其角降る程もらはれる

(五四二一)

その当座雨の如くに点が来る

(一五三二)

雨乞の善隅田中で其角様

(一三三二六)

むらのもの其角をやつと言覚へ

(拾四)

いろいろな想像され、

八百善へ今なら連れて雨の礼

(一三三二九)

句の礼に其角十七俵もらい

(一一九一三)

と翻礼のことまで詠まれている。

みの市は其角この方出来る也

(二〇二九)

浅草の鑓市(三月十八日)もそ

れからできただろうと洒落てい

る。

師は寒き弟子は涼しい名句也

(九七四〇)

雨にぬれ雪に転んで名が高し

(五九二九)

はせをの片腕から大雨がふる

(傍初2)

嵐より雪より雨で名をあげる

(五九一四)

雨腕の弟子雨も呼び雪もふり

(二二三四)

と芭蕉の「いざさらば」や嵐雪と

も比べられている。

おのが身のつくりをくらふ狐か

な

ある時、畑へ狐がやって来て瓜

を食うので困るといので、其角

は右の句を書いて瓜畑に張つたら

狐が来なくなつたという、話があ

るので、これにも川柳は興味を持

ち、

稲荷では降らせ狐はよせつけず

(傍三十一)

田は稲荷畑は狐で名句なり

(二九二三)

句の以後は瓜に獣のへん付ず

(五六二九)

その後にはけものへんなく瓜が出

米

(九八二四)

狐でも無筆ではなし瓜ばたけ

(七四二七)

と作っている。

其角の奇跡として、宝水の頃、

豪遊で有名な紀伊国屋文左衛門に

ついて、書家文山と共に、花街に

遊び、其家の春山桜花の図の屏風

に賛を乞われ、紀文は「比所小

便無用」と、文山に書かせた。そ

れで其家の主人も不興気であつた

が、其角は早速「花の山」と書き

添えて俳句としたので、主人も喜

雨乞の外小便も名を流し

(六一二四)

小便は五文字雨には十七字

(六〇〇五)

小便に花をさかせる俳諧師

(四三三五)

小便も反古にはならぬ花の山

(五四五 一六三二七)

小便を五字で清める花の山

(六一二〇)

小便をきれいにふいた花の山

(七九一〇)

花の山と書いて小便よみがへり

(五二一二)

五文字足すまでは不興な金屏風

(一六二二九)

通俗の小便無用鳥居也

(二五三〇)

妾と文山小便も金屏風

(一三三三二)

などとおもしろく詠んでいる。

元祿七年十月十二日、芭蕉の臨

終には其角も列して「芭蕉終焉

記」を書いてい。そうして宝水

四年(一七〇七)二月三十日四十

七歳で歿し、二本榎西町の上行寺

に葬られ、法名は、「喜覚居士」と

つけられた。この上行寺には、

父榎本東順の墓もある。また寺内

に「宝井」という井戸があり、其

角の姓はこれからとつたものとい

われている。

埋れぬ名は宝井と柄井なり

(一〇一〇)

と、柄井川柳と共に後世に讃えら

れている。

小便に花が咲たで名句也

(三四二五)

これも川柳の好材料になり、

五字足して名句になった小便所

(傍三二)

と、弓町の観世で道成寺を演ずる

と雨が降るといわれていたことに

る

(二二二四)

恐れ入りましたを其角聞きあき

(二二二七)

御名句でござると其角聞きあき

(二二二九)

えられたであらうと、

三囲の雨以後傘をかし初め

(三三二九)

とも詠まれ、越後屋では、にわか

雨に傘を貸したことも有名であつ

た。

そうして其角は各所でほめたた

えられたであらうと、

三囲の雨以後傘をかし初め

(三三二九)

とも詠まれ、越後屋では、にわか

一路集

セールスマン

大鶴喜由選

美しいセールスむげに断れず 井蛙
 国訛り出て愛されるセールスマン 八九寸
 ほめることなくセールスちとあわて 秀峰
 折角の休日セールスに叩かれる 隆史
 セールスマン先づ友達にあたって見 映輝
 土地言葉出してセールスマンの知恵 伊津志
 セールスマン身なりの割に楽でなし 淀月
 セールスの口のうまさにつり込まれ 光郎
 セールスマン今日はちがつたコンビで来 たけお
 セールスマン犬の機嫌もこつておき 一征
 セールスの来ないあはら家金を貯め 宗義
 セールスマン母校へ仕事始めに来 不二
 新米のセールス縁故から始め 句業坊
 優越感やんわりなでてセールスマン 恵二朗
 同窓会名簿をセールスマン頼り 十九平

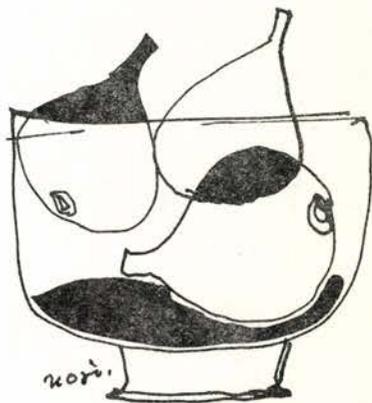
由山生

善湖清

鶴谷川

大杉早

セールスの口に月賦の苦が続き 滋雀
 セールスマン妻の趣味まで知つて居た 宗太郎
 とんがった靴光らせてセールスマン 信二
 買いたいと思わずもセールスマンの腕 繁太郎
 セールスマン機微とこつと腕をあげ 晃男
 こう言えば売れたにと思ふセールスマン 晃男
 足に生きたるセールスマンの心意気 圭太
 何となくセールスマンの身のこなし 半月
 サンガラスかけてセールスマン 光道
 こたけの内緒におおむセールスマン 保夫
 セールスを始めた妻のめかしすぎ 静水
 お得意の縁も取りもちセールスマン 章雅
 セールスマンならぬ勘忍して移ぎ 鶴丸
 セールスマンはい坊ちゃんとかガムを出し 方竿
 良心の痛みも一寸セールスマン どんたく
 セールスマン世間話で釣り上げる 千晶
 工事場の焚火で保険すすめられ 旭峯
 セールスマン先づ奥さんを攻め落とす 李鳥
 セールスマン今日の成績酒にする 同



見本だけでもセールス置いて去に 勝子
 ハンサムなセールスマンで買われる 同
 口ど足あと心臓でセールスマン 野迷路
 B.G.はもつさりセールスマンはシヤレ 同
 試供品並べセールスよく喋り 初甫
 後釜を連れてセールス札に来る 同
 セールスのベースにするく巻込まれ 九呂平
 セールスマン今日は宿賃にもならず 同
 セールスマン歩合になつたいそがしさ 愛鳩
 見るだけは見ておくれとセールスマン 同
 強引なセールス遂にどなられる 酔夢
 タイミング上々セールスものにする 同
 どこでどう聞いたか家を売りにくる 春巳
 セールスマン女の弱さ身につける 同
 セールスマン恋を売れる気にもなり 芳仙
 セールスマン人相学もちと囃り 同
 方言も出してセールス板につき 同
 断け出しのセールスお茶も飲まず去に 同
 佳句

セールスマンきつかけを待つ膝に馴れ 井蛙
 セールスマン売れると見込むおぼりよう 晃男
 セールスの靴が邪魔になる日暮 木魚
 セールスの根氣に負けた耕松機 弘朗
 セールスマン舌一枚で追い出され 可住
 セールスマン食いつきそろうな犬もほめ 万竿
 口下手のセールスマンにある実意 旭峯
 ノルマ過重セールスマンの靴がちび 十九平
 セールスマン先づ風船をふくらまし 宗太郎
 セールスの悲哀グラフで鞭打たれ 滋雀

人
 セールスマンああ恩師とは知らざりき 春子
 セールスのほめたい猫が見当らず 杏花
 セールスマン宿題一つ解かされる 可住

天
 軸
 セールスの定款にない嘘も云い

地
 杉谷湖山選
 送られた地図を頼りに探しあて 勝子
 事故現場地図ではセールス区域なり 隆史
 夏山の地図へ女姓も口を入れ 章雅
 世界地図はがせばあいた壁の穴 静水
 駅から近いと地図を小さく書き 保夫
 損さぬ土地と地図を出し口説き 万竿
 金欠のパカンス地図をたいひろげ どんたく
 ぼくんちも地図は載つてる○番地 晃男



川柳人生観

福井野迷路

先日横山エンタツに会った。彼は三田小学校で、私より四年下で、六十九歳、共に川柳七十の手習い組である。彼は言う。路郎先生とは二十年程前に一緒に飲んだことがある。路郎派作家の川柳には厚みがあるから好きやと言う。この次の会には是非連れて行って呉れと頼まれている。お笑い半生紀のベテランが、川柳の厚みを言うのも面白い。笑いにも厚いのと薄いのとある。一番うすいのが腋の下のくすぐり笑いだ。手をはずしたらパッと消える。万才、落語、喜劇その他日本人の生活にはこの薄い方が多い。

例えば甲と乙が喧嘩した。甲は乙に河馬と言った。三年経って、乙は動物園に行った。乙は急に甲の

家へどなり込んで頭をぶんなぐった。この話には三カ年の時間と、初めて河馬を見たと言う思考行程がある。之には理性がはいってくすぐり笑いや長持ちがする。

英国国民のユーモアと日本国民のお笑いとをこっちゃんにしては困る。所謂ユーモアには厚みがある。少し考えなければ笑いでない。その代りくすぐりのように直ぐは笑えないが同時に又直ぐには消えぬ。永い間人生を楽しくしてくれる。

英国議会で政府党に対しキングの反対党が致命的な大論戦をぶつ始める場合には、先ず最初両党首の演説があり、之に必ず簡単なユーモアを交えて議員にはのかな笑いの思考を与えらる。これが日本の議会なら

絶対にユーモアなんかあり得ない。況や万才式なくすぐりでもやったら直ちに懲罰だ。英国の議会でユーモアで議員の理性に余裕を与える。ユーモアは最高の理性だと言うのはこのことかと思う。

日本人の薄っぺらな笑いの五十年のベテランも古稀にして、初めて厚みのある笑いの詰論を得たのも誠に尤もだと思ふ。

日本人の人生には笑いだけではない。悲しみにも、いかりにも、批判にも、うがちにももっと厚みがあったら然る可しと思ふ。

路郎先生は私の川柳七十の手習いの初め頃にはよく君の句はそうですが川柳に陥りやすいとよく注意して下さった。成る程そうかと言つたら終いだ、薄紙のようなもので感想は一秒ももたぬ。

もっとあとに残るうがち、笑い、悲しみ、いかりが必要だと思つた。人生の厚みをついた句、作者は死んでも句は地球と運命を共にする句、エンタツが路郎派作家の句には厚みがあるから好きやと言つたがよく

川柳不朽洞会

(十月)

指導

麻生路郎

長谷川一徹

中村祐吉

田中辰二

岩崎愛二

中村直勝

麻生磯次

井上吉次郎

島浦精二

恒藤恭

前田勇

洞友

山村孝之助

山本雨迷

山路閑古

柴谷幸二郎

麻生霞乃

橋本緑雨

高鷲亜鈍

沢田四郎作

東野大八

中島紫痴郎

戸倉普天

奥村丹路

不朽洞会員

特別会員

上田翠光

木村孤浪

戸田古方

西尾葉

市場没食子

若本多久志

川村好郎

松江梅里

正本水客

黒川紫香

若柳潮花

小西無鬼

西いわを

八木摩太郎

北川春葉

寺井鏡々

古川麗花

前山北海

三輪峯園

大阪形水

井上湧三

西垣錦風

築山快夢起

市岡暁舟

藤本満年

羽佐間柳葉

福田妄夢

吉田圭井堂

国広半休

長野井蛙

友淵貴山

太田良子

直原七面山

西森花村

河村春日

足立春満

榎南夏六

石川侃流洞

安岡珊枝郎

河村瑞川

木村千容

田垣方大

野村味平

木村水洞

福田丁路

真鍋一瓢

佐野白水

後藤梅志

平尾太希志

木口賀峰

小西雄々

菊田いさむ

山川阿茶

岩崎一文

金井秋

伊藤茶仏

那谷光郎

中島小石

福井野迷路

麻生アト

大西八歩

石曾根民川

布施筑川

桜川不水

浜田久米雄

菊沢小松園

清水白柳

小川恒明

新川博也

尼谷緑之助

弘津柳慶

杉谷湖山

佐野史由

小沢喜水

大鶴香月

野本文峰

小林晴星

小根白星

龜山淡舟

山根淡香

富岡白香

飯降白香

西辻竹青

林野青光

阿万南柳

岸万南柳

黄瀬美秋

福島鉄児

青木遊星

服部十九平

大森娘句楽

長谷川三司

若林草右

浜畑胡蝶

益永貞女

山田季莊

山田鳥莊

楢村一善

田村藤波

白井三林坊

下山清潮

本田惠二朗

松川夢生

馬場夢生

村上ゆづる

森本法泉子

小池しげお

浜野圭三

柳界展望

句会

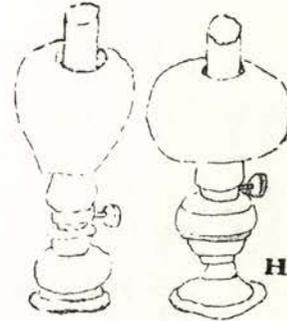
▼本社十月句会は八日(金)午後六時から土井文謙追悼句会として、千日前電停前自安寺で開催される。柳縁につながる柳人諸氏多数、お誘い合わせの上ご出席をお願いする。▼七面短詩クラブ川柳部句会(和歌山市)は九月二日(水)午後六時から北新地の朝千鳥で開催。▼南海電鉄川柳会(大阪市)九月例会は十七日(木)午後六時から難波親和クラブで開催。▼コクヨ川柳会(大阪市)九月句会は二十五日(金)午後六時からコクヨ株式会社社会議室で開催。▼大阪通信病院川柳会九月句会は二十六日(土)午後二時から同病院北館五階会議室で開催。▼川雅備前支部(岡山県)八月例会は二十三日浜田久米雄居で開催。

出席者はゆかた句会の思い出を語り合った。▼川雅岡山支部九月例会は光好陽子居新築記念句会を兼ねて十二日陽子居で開催された。▼岡鉄岡山地区倶楽部文化部秋季川柳大会は十月十一日(日)一時から岡鉄クラブで開催。兼題、超特急・案内所・客引き・駅前・極楽、投句は前日迄に岡山駅旅客係本部沖野宛。▼噴煙吟社秋季川柳大会は昭和三十九年十月十一日(日)午前十時から熊本水道町県福祉会館四階第二会議室で開催。▼第十三回東北川柳大会は十月四日午前十時から仙台市東二番町河北新報別館で開催。▼市川市文化祭川柳大会は十一月一日(日)正午から市川公民館で開催。兼題、青年・優勝・がっち

り・通釈・天女、投句は百円封入後三時から難波高島屋五階アールの上り川市八幡一ノ六八松沢博方市川市文化祭川柳大会係宛。▼第二回阿古木川柳大会(津市)は十月四日(日)正午から伊勢新聞社三階ホールで開催。▼時の川柳(神戸市)十月句会は五日(月)午後六時から祇園神社で開催。▼第七回豊中市民川柳大会は十月十一日(日)正午から豊中市立中央公民館で開催。兼題「空」宣介選、「踊り」角風選、「相談」議朗選、「味」古方選、「バラ」北人選、郵券一〇〇円句集代、投句不切

10月五日、投句先豊中市岡町北五丁目一一豊中市立中央公民館内市民川柳大会係。▼我我荘納涼川柳会(名古屋市)は八月二十五日、東山公園一粒荘で開催。▼川雅岡山支部八月例会は二十二日岡鉄クラブで開催。▼長岡市民中越川柳連盟第五回川柳大会が、十月二十五日午前十時から長岡鉄道職員集会所で開催される。宿題「水」「美化」雲行き「長い」「聖歌」「世界の友」各題二句。バッチ手月十日十円切手七枚同封、長野市東新町二新保世意知宛。

▼路郎主幹は九月十八日(金)午後三時から難波高島屋五階アールの



で開催された菅橋彦画伯をしのぶ懇話会に出席された。高島屋七階催場では「浪速の御民菅橋彦展」が開催されている。又九月五日(土)午後二時からの大阪芸文協会の菅橋彦、白川

用吉岡大阪名誉市民をしのぶ会に出席生田花朝さんの「菅先生想出のあれこれ」大西利夫氏の「白川先生と文楽」が談された。▼山川阿茶さん(大阪市)は九月十三日学会で京都へ。比叡山のドライブを楽しみ、夜は祇園で、昔知っていた舞妓さんのその後を聞いた

▼佐野ト占氏(八代市)から、「本年二月から独立して旅行営業所の個人営業を始め、多忙のためペンを取る間もなく川柳と例会に備えるためのがやっという状態では、われながら嫌になりました。路郎先生が八代へお出になりました当時のメンバーで川柳を続けておりますものは一人も居ません。坂田静夫さんは七十六才になられた上、大思いされて退院されたばかりですし、満田魚屋さんはお元気ですが商売一本にされています。」▼石井黙平氏(豊中市)は、先生が句会場で仰言っておられましたと同様に、老生も頭の命



春に結婚された安本美喜田田さんと、晴れ姿

●アベノ店 上六店●

***お買物はいちばん便利な
キンテツへ!!**

**アベノ・上六
近鉄**

アベノ 621-1251
上六 71-3331 休

不朽洞の人々



書物雑誌研究家室本多省三氏

◇趣味も生活も一貫して日本的である。
人生観や処世法の中には、俳句の師であった、かつての朝日新聞天声人語の故水井瓢斎翁の感化の大きい事を痛感している。一升瓶には二升の水は、はいらぬ事をさとっている。いので、いのちある句なんか出来そうにもないが、せめて柳志が此の世に生きていた事の、証拠になる様な川柳の一つ位は、遺して死にたいと思つている。

一と皮をむけば窓から乗る気なり

(柳志)

命を足の力が受け付けず、治療と自重はしておりますものの快力に向わず腐りきっております。」

▼山田季善氏(高槻市)は九月十二日十三日の両日山中温泉、東尋坊を周遊された。打合せ会議を兼ねての小旅行とのこと。「夜の温泉街をただぶらぶらと歩くだけ」

▼林野睦光氏(呉市)は九月六日(日)の第七回近県川柳大会に竹原へ。席上久しぶりに清水白柳氏らと歓談された。▼第十六回恒例句会(岡山県弓削町)では浜田久米雄氏が席題の選をされ出席百三十名、投句百二十名の参加を得て盛大であった。▼吉田圭井堂氏(堺市)は今夏二回目の断食療法を断行されたが、前の時は順調だったが今回は齡のせいかわ小々へこたれました、まだ快復が順調でな

いので、家で自重していられる由、一日も早く快癒され句会に顔を見せられるよう祈っている。▼小西無鬼氏(兵庫県)は川柳まつりの大優勝権永久保持についての喜びを地方新聞に大々的に寄稿掲載されたので、いささか反響があったよう、これからも川柳の社会化に精進せられる。▼河相すむ氏(西宮市)樋口丹遊氏(西宮市)林夢虹氏(豊中市)橋高薫風子(大阪市)の明和グループは窪田久美子さん(尼崎市)辻川和子さん(大阪市)を同道、九月十九日から二泊三日の行程で、潮岬・橋杭岩・勝浦温泉・瀬・那智山の周遊を楽しまれた。「嶮雲最南端の丘に佇ち」すむ、「ひぐらしの灯台の海今日は風」久美子、蜜柑青しこ

れ来た岬の空は錫雲」夢虹、「灯台は見返えるときに惜別す」薫風子、勝浦温泉にて。

句集・柳誌改題

▼国鉄川柳句集(第八集)一九六四年版が八月二十日全国鉄川柳人連盟(長野市栗田吉原佐藤曙光方)から発行された。四百五十名の会員を擁する連盟のざっと半数に近い二百十名参加の集大成。不朽会員の小西雄々、山内静水、辻白溪子、大江秋月、吉原紅月、都倉求女、松川杜的、宮口笛生、浜田久米雄の諸氏等の参加がある。B列六号、百三十五頁、定価百五十円。▼柳誌「しづをか」は十二号から「鷹」と改題され、静岡市豊原町五五小泉方川柳「鷹」集団、「鷹」発行所から出るようになった。

番地が変更になった。尼崎市灘波南通三の七一▼弘津柳慶氏は郷里柳井市から広島地方局へ栄転さ

酒 清

灘・魚崎

金露酒造株式会社釀

甲

れ、広島市皆実町二丁目日本専売公社広島地方局病院へ移られた。

▼村田伝左衛門(陸郎)氏は水らく病氣療養されていられたが薬石効なく九月十八日午後十時十分永眠され二十一日午後一時から東京都杉並区松庵北町一四四の自宅で仮式の告別式を営まれました。謹んでお悔み申上げる。▼古谷盈光氏(東京都)逝く。八年間の長日月を病床に臥していられた東京都壇の名作家、旧新屋会の盈光氏が九月十九日に惜しくも亡くなられた。告別式は二十一日午後一時から執行された。謹悼。

誤植訂正

▼前号二七頁三段二八行目作者不明とあるは内藤さき子の句。
同▲二八頁三段三四行目「おちちよこちよい半分さきてとんで出る」の作者天正みさ子は高橋操子の誤り。

不朽洞会から

(薫)

☆常任理事会

九月四日(金)午後七時から阿倍野区松崎町三ノ一〇割京大萬樓上で開催。

- 一、ゆかた会の反省、
 - 一、路郎主幹作品頒布の件、
 - 一、その他の件、
- 右の諸件案について協議、午後九時散会した。出席者は路郎師、春葉、梅里、栗、多久志の諸氏。

☆新会員紹介

九月

▼軽部日東里(仙台市)正
縁之助氏推薦(多)

飛・燕・往・来——編集局

東野大八氏より（岐阜）

— 路郎宛

サラリーマンになってどうやら一年です。早いものですしかし、家内工業的社なものですからサラリーは安いし、

スリを飲んだ伊右衛門宅のよいうなことを申します。お察し下さい。その点、腹乃先生の方が佳人でいらせられます。

田中美喜子さんより（熊本）

— 路郎・野乃宛

ポナスはなしで話になりません。働くほど借金がふえるという次第で、うちのかあちゃんも Tail 工場の内職をやったりして子供の小遣い稼ぎをやっています。血の気の多い短気でケンカ早い亭主を持ったが、運のつきと昨今ではあきらめているようです。身体も丈夫でないで目下神経痛をたのしんでいます。ヤイト十六個をおしりのあたりにキラ星の如くならべて、煙を立てていますので、雑木草の山焼きの如き景観を呈し、もはや女体以前、ハチの巣バアさんです。先年の街でトラにはねられ、今一息でアノ世行

天災地変続きのその上の災畧、人間は一生試練の受け通してございますね。目下川雑ご執筆中の奥様のものがたり近來にない楽しい頁でございます。やっぱりあの時かの時のご努力、ご判断、そしてご心労、先生お二方様の人間の大きさを今更ながら知ることが出来まして、至らぬ私の生活を反省させられ、且つ尊いご教訓にすっかり嬉しくもなっております。夫婦の不思議さ深さも人生にとって何んという喜びと悲しみの幾年月かとしみじみふり返ってしまっております。

後藤梅志氏より

— 路郎子宛

も心残りなく、文化芸術の域をはみ出しておりましたようにも、人間としての美しい精神、そして人情、誰でもどうすることの出来ない精神性を高め得られたとすれば一生悔ない収穫だったのだなどと考えてみてもおられます。お笑い下さいませぬように。

九月廿一日から一週間の予定で白浜へ来ています台風がくるというので入江は船で一杯幸い小生の体も漸次常態に復しつつあり七、八月のけいこがたえたので休養をとり

に來たのですが家内も一緒なので考えることもなく句も出來そうにありません。句会へのご無沙汰が気になっていま

すが、人生にはいろいろな時期があるものと観念していただきますぞ先生によろしく云って下さい貴下も働らき過ぎないようにお気をつけ下さい。

ペンも住所控も忘れてくる始末で少しボケて来た感じで

す庭も外で見る道端も夏草が一ぱいに繁っていると温泉も荒りようたる感がします。

白浜もひまお彼岸も療養所

梅志

廿八日には帰阪します早々

九月二四日—白浜光風荘にて

路郎先生の喜壽・金婚の祝賀について

— お知らせとお願い —

日本柳壇の巨匠であり、我等の恩師である麻生路郎先生の喜壽・金婚祝賀行事については本会が主体となつて昨秋以来慎重な企をととのえ、全川柳人ご賛同の下に一大盛典を挙げる運びになつておりましたところ本春に至り路郎師から

諸君のご厚意は衷心から感謝するが、目下自分の健康状態では到底そのご厚意にお応えすることがむずかしいと思つてからお断りしたい。

と固辞されましたので、本会ではその前後策につき数回役員会を開催いたしましたして、先生のお身体に障りのない範囲で、同時に先生のお氣持に添うた我々の祝意をうけて頂く行事として左記企画のご揮毫についてご諒承を頂きまして次第でございます。

ご承知の通り先生はご高齢のことでもあり、願わぬこととはありますが、これが最後のご揮毫となるやを思ふ時、我等川柳人として愛蔵すべき家宝を得る、得難きチャンスではないかと存じますの

で、何卒この機を過ぎずご参加お申し込みの程お願い申し上げます。

昭和三十九年六月吉日

川柳不朽洞会 常任理事

北川 春葉
松江 梅里
川村 好郎
西尾 栞
若本多久志

麻生路郎先生の
作品頒布

作品——一、軸・横額二、色紙三、短冊

揮毫料——不要とし、お申し込み参加者より、喜壽・金婚お祝金を右相当額拠出して頂きます。この額につきましては常任委員会に於いて各標準を定めてありますので、お申し込み受付と同時に詳細な規定をお知らせいたします。

頒布期間——先生のご健康状態も考えまして、お申込順に六月以内とし、昭和四十年三月迄とします。

大阪市住吉区万代
西五丁目二五

申込所 川柳不朽洞会

電話大阪六七一局六〇八一

大萬川柳

兼題 「薄情」

入選発表

選者 麻生路郎先生
投句総数 五百十一句
入選 四十五句

香川 醉夢

薄情にされてフアイトが湧いてくる

羽見野 圭太

薄情を責めず独りで育てる気

慶之助

孕ませて養子とるものとして逃げ

大阪 琴女

薄情なおんなになったアイシヤード

大阪 痴亭

愛終る雄かまさりの顔かじり

松原 万竿

振りかえり早く歩けと倦怠期

大阪 水京

ほどほどにしとけと女将目で合図

富田林 東雲楼

落ちぶれて訪えば居留守を使われる

京都 八九寸

落選を呼びすてにして寄りつかず

大阪 文秋

薄情にされてもあとを追いつづけ

大阪 保夫

薄情やなあと厚かましい奴が言い

加賀 光郎

すすり泣遺族へ非情のマイク向け

無けりや血でも売れとチンピラおごらされ
仙台 光道

薄情な奴が一番持つており
石川 宗太郎

薄情なまでに泣かせて有児法
枚方 珠笑

定年の帰郷見送る人もなし
大阪 章雅

薄情を拗ねて救いの手もはねる
大阪 あいさ

無い袖は振れず薄情者になり
高槻 静馬

俺れよりもおんなは金に惚れていた
大阪 良

薄情な女過去には触れさせず
東北 好郎

土壇場に來て銀行の冷たすぎ
笠岡 桃里

薄情な顔に落語家きりかえる
大阪 阿茶

京訛りちらっと見せた薄情さ
大阪 梅里

薄情になってしもうた貧富の差

薄情な人の子やけんど産むつもり
大阪 清人

薄情な窓口へただばやくだけ
大阪 小松園

薄情な女の横顔笑つてた
岸和田 きさ子

ハガキ一枚の不精薄情者にされ
大阪 晃

裏めてばかりいる薄情が身に応え
大阪 晃

衰運へ友一人去り二人去り
大阪 柳志

薄情にされて女はなおのほせ
大阪 柳志

薄情な本家の嫁にリードされ
西宮 多久志

薄情な家は昼間も門をしめ
西宮 多久志

薄情な奴と知つて借りにゆき
西宮 多久志

薄情なようだが名刺ごとつづける
馬しと断る思い薄情に似もたれど

馬しと断る思い薄情に似もたれど
五客

家族会議老父預かる順で採め
大阪 十六里

無心だとわかれば今日は忙しい
岡山 十九平

薄情な男チヨビ髭など生やし
大阪 柳志

剃りあとの青さ薄情な顔に見え
議員章もう薄情な顔になり
人ノ句
大阪 梅里

地ノ句
一三 夢虹 八、〇 豊中
一四 静波 七、五 羽曳野
一五 河茶 七、〇 大阪
一六 美房 七、〇 富田林
一七 清人 七、〇 大阪
一八 遠二 六、五 笠岡
一九 進之助 六、五 大阪
二〇 光道 六、〇 仙台

薄情な男へ寝酒まで与え
天ノ句
岸和田 きさ子

大萬川柳ベストテン (九月現在)

梅里 一六、五 大阪

きさ子 一五、五 岸和田

好郎 一二、〇 泉北

小松園 一二、〇 大阪

柳志 一一、五 大阪

晃 一一、五 大阪

桃里 一一、五 笠岡

静馬 一一、〇 高槻

方大 九、五 倉敷

章雅 八、五 大阪

木魚 八、五 和歌山

宗太郎 八、〇 石川

大萬川柳会

投句光
大阪市阿倍野区松崎町三ノ十

次ぎの兼題 「頭」 五句以内
〆切 十月十日
発表 十月二十日
十一月の予告「つけ落ち」
〆切 十一月十日
〆切 十一月二十日

以下略

一著名作家の川柳句集一



好評噴々

定価300円
送費 50円

大阪市住吉局区内万代西5丁目25

発行所 川柳雑誌社

電話 大阪 6081 振替口座大阪75050

浜田久米雄著 麻生路郎序
★本句集の著者浜田久米雄氏は岡山の産。多年不朽洞会員として又国鉄川柳人として古豪の名をほしいままにしている。三十余年の柳歴を飾る数千句中より百句を自選し、各句に感想を附して世に問うもの。
★御送金は川柳雑誌社振替口座大阪七五〇五〇番をご利用が便利です。(切手代用可)

いのちある句を創れ



投稿規定
用紙は原稿用紙
文字は正
確
締切毎月十五日
投稿先
本社宛

本社 川柳忌句会 (大阪市)

9月7日 午後6時
会場 千日前 自安寺

古代ギリシャのオリンピアの聖火は、
今も世界を結ぶ平和のシンボルなら、柳
祖川柳の点火した川柳の心の灯は、柳友
のみが知る喜びの生活のシンボルだと言
えよう。一七四回目的柳翁忌を前に開か
れた川柳忌句会は、平素見えぬお顔の人
に接すると言うなつかしさがある。本日
の路郎師の柳話、柳翁を初め、一周忌
の菅橋彦、白川朋吉、この日三回忌の吉
川英治の三大人の在りし日の追懐談や、
「無形の価値は無限である」と言う演題
の下に、作句上有益なる指示を与えら
れ、後、席題披露後、路郎師から川柳
忌の恒例に依り新選者(辻白溪子、辻圭
水、西出一栄の三氏)の推薦発表に満場
の祝福の拍手があり、続いて兼題披露に
耳を傾けた。因みに本日の不朽洞杯は、
園秀作家西出一栄さんが獲得、万丈の顯
氣を示された。時に午後九時半。

出席者 路郎、八郎、水客、摩天
郎、柳志、凡子、白柳、梅里、水京、吉
太郎、野迷路、柳太、メ女、みさ子、季
費、凡太郎、紫香、阿茶、恭太、庸佑、

(摩)

兼題「命日」 清水白柳選
命日に花屋忘れず来てくれる 旅風
命日のときめく心憎わかし 章雅
二日酔日は命日だったのに 多久志
祥月に気付き動物園から詣けり 黙平
今日も一日命日が延びた交差点 吉備郎
坊さんの顔見て包む時もあり 金三
命日は竿の手入れて日を過し 千代
命日だけマッチで灯したおそろしく
アパートはご命日でも稼ぎに出 金三
命日の母はテレビも知らず死に 摩天郎
家出して親の命日さえ知らず 文秋
先代を着に酔うた七年忌 柳志
少女の命日人形へ呼んでみる メ女
ご先祖の命日繰って病みつづけ 珠笑
顔知らぬ親の命日ピンと来ず 一舟
命日をくり上げて出して出る社用 句葉坊
命日を語れば見知らぬ人が住み 珠笑
ご開山の忌日に死んで羨まれ 静馬
再婚はしたが命日気が重し 清人
命日の花枯れたまま共稼ぎ 花梢
命日へ無口が話すエピソード たつみ
命日は飲み友達がよく覚え 野迷路
命日を忘れ遺産で揉みつけ 珠笑
殺生な日に死ななはたと汗を拭く 野迷路
死んだときは騒ぎ命日忘れられ 圭水
七回忌やっぱりミルク供へとき 好郎
命日に白い鼻緒の下駄揃え 金三
御命日忘れなやと嫁に言い 水京

兼題「束縛」 松江梅里選
命日へ遺愛の菊はまだ咲かず 水客
飯場の夜母の命日雨しきり 好郎
実母の命日長女だけが知っていた 八郎
あれだけ泣いて命日忘れなや 清子
命日にかこつけ実家へ帰る愚痴 滋雀
命日へきつちり小姑戻って来 一栄
命日を墓前に佇てば胸が澄み 白柳

兼題「月光」 正本水客選
月光が心のしみを拭いて呉れ 旅風
ワンタン屋の馬穴に写る月光り 句葉坊
月光に浮び上ったシルエツト 有子
月光の何か悲劇のありそうな 圭水
ビル建てて月の光を忘れかけ 吉備郎
真夜中の湯ふねに旅の月光る メ女
焼跡の広さへ月は光ってる たつみ
月光へ張り込み場所が見当たらず 白溪子
名月を拝めば孫が不思議がり 吉太郎
月光へ家事の話はよしましろう 柴
月光に故人をしのぶ通夜帰り 珠笑
月光に浮ぶ球場の怪奇めき 好郎
月光におでんや照る街更ける メ女
月光へ花火つぎつき突き刺さり 白溪子
月光の中に宵寝をする 団地 柳志
浸水も去らぬ薨へ月が冴え 好郎
月明の屋根に忍者の影を見た 恭太
月光をまともに他愛なくねむる すすむ
月光の金波次第に広くなり 一栄
灯を消して月光しばし楽しみ 静馬
月光へピアノの音がほしくなり どんたく
月光で読むラブレターは返り 一栄
水溜り月の光りをそこに置く 白柳
月光を浴びてハミング業しろう 阿茶
のり遅れ月光まともに一人佇ち 柴
尺八の音が月光をふるわせる 章雅
月光のなかのポストを曲つて来 水客

兼題「命日」 清水白柳選
命日に花屋忘れず来てくれる 旅風
命日のときめく心憎わかし 章雅
二日酔日は命日だったのに 多久志
祥月に気付き動物園から詣けり 黙平
今日も一日命日が延びた交差点 吉備郎
坊さんの顔見て包む時もあり 金三
命日は竿の手入れて日を過し 千代
命日だけマッチで灯したおそろしく
アパートはご命日でも稼ぎに出 金三
命日の母はテレビも知らず死に 摩天郎
家出して親の命日さえ知らず 文秋
先代を着に酔うた七年忌 柳志
少女の命日人形へ呼んでみる メ女
ご先祖の命日繰って病みつづけ 珠笑
顔知らぬ親の命日ピンと来ず 一舟
命日をくり上げて出して出る社用 句葉坊
命日を語れば見知らぬ人が住み 珠笑
ご開山の忌日に死んで羨まれ 静馬
再婚はしたが命日気が重し 清人
命日の花枯れたまま共稼ぎ 花梢
命日へ無口が話すエピソード たつみ
命日は飲み友達がよく覚え 野迷路
命日を忘れ遺産で揉みつけ 珠笑
殺生な日に死ななはたと汗を拭く 野迷路
死んだときは騒ぎ命日忘れられ 圭水
七回忌やっぱりミルク供へとき 好郎
命日に白い鼻緒の下駄揃え 金三
御命日忘れなやと嫁に言い 水京

兼題「束縛」 松江梅里選
命日へ遺愛の菊はまだ咲かず 水客
飯場の夜母の命日雨しきり 好郎
実母の命日長女だけが知っていた 八郎
あれだけ泣いて命日忘れなや 清子
命日にかこつけ実家へ帰る愚痴 滋雀
命日へきつちり小姑戻って来 一栄
命日を墓前に佇てば胸が澄み 白柳

兼題「月光」 正本水客選
月光が心のしみを拭いて呉れ 旅風
ワンタン屋の馬穴に写る月光り 句葉坊
月光に浮び上ったシルエツト 有子
月光の何か悲劇のありそうな 圭水
ビル建てて月の光を忘れかけ 吉備郎
真夜中の湯ふねに旅の月光る メ女
焼跡の広さへ月は光ってる たつみ
月光へ張り込み場所が見当たらず 白溪子
名月を拝めば孫が不思議がり 吉太郎
月光へ家事の話はよしましろう 柴
月光に故人をしのぶ通夜帰り 珠笑
月光に浮ぶ球場の怪奇めき 好郎
月光におでんや照る街更ける メ女
月光へ花火つぎつき突き刺さり 白溪子
月光の中に宵寝をする 団地 柳志
浸水も去らぬ薨へ月が冴え 好郎
月明の屋根に忍者の影を見た 恭太
月光をまともに他愛なくねむる すすむ
月光の金波次第に広くなり 一栄
灯を消して月光しばし楽しみ 静馬
月光へピアノの音がほしくなり どんたく
月光で読むラブレターは返り 一栄
水溜り月の光りをそこに置く 白柳
月光を浴びてハミング業しろう 阿茶
のり遅れ月光まともに一人佇ち 柴
尺八の音が月光をふるわせる 章雅
月光のなかのポストを曲つて来 水客

兼題「老木」

傍島静馬選

老木もやっぱり春は蕾、持ち どんたく
 花も実もつけ老木の鉢に生き 章雅
 突丈挿接木と老松、労わられ 黙平
 命尽きて今老木、踏みされ 宗義
 老木に生きて生きてと励まされ 旅風
 老木の梢まともに陽をはじき すすむ
 老木を仰げば自分の空があり 水客
 老木に囲まれひっそり元宮家 清人
 老木に寺の歴史を見守られ 文秋
 根っただけ残して天然記念物、女
 老木に隠れて泣いた嫁した頃 金三
 老木は繁り故郷に父母はいず かつみ
 縄を張る老木のある旧家 阿茶
 老木に雑草茂る壳屋敷 金三
 老木の陰に育ちて陽の目みず かつみ
 老木が旧家としての酒をつけ 千代
 老木をよけて国道曲つと 多久志
 伝説の中で老木生きている かつみ
 老木へ赤い鳥居が又一つ 野迷路
 老木のたたりが恐い道づくり 恭太
 老木をきってアパート出来上り 恭太
 老梅の花減ってゆく淋しさよ 阿茶
 老木を倒してゴルフ場が出来 清人
 千年の昔も知ってる杉木立 庸佑
 老木はそのまゝ校舎が建ちかわり 白溪子
 老木も痛み私も神経痛 清子
 老木に一花咲かず渡り初め 吉太郎
 老木の手術セメント詰るだけ 文秋
 老木の祖父の代から色変えず 阿茶
 自然には勝つが老木ガスに負け 一舟
 老木が会長職にしがみつ き 柳太
 生きている姿老木に教えられ 水客
 老木の由来を聞いたので撮つし 白溪子
 老木へ観光バスは除行する 栞
 一と廻りして老木は見上げられ 柳志

老木に何んの記念か傷絶えず 静馬
 席題「共稼ぎ」 川村好郎選
 保有所の不足に悩む共稼ぎ 文秋
 共稼ぎ派手に暮らしただけのこと かつみ
 共稼ぎ妻の収入に追い越され 滋雀
 共稼ぎどっちも肉を買って来る 柳志
 共稼ぎいっとはなしに敷かれけり 野迷路
 共稼ぎしてまでためて株ですり 一舟
 月賦済み子が生まれても共稼ぎ 天樹
 共稼ぎ収入だけをうらやまれ かつみ
 共稼ぎ予算出来たか子をはらみ 一舟
 軒店が悲願、屋台の共稼ぎ 静馬
 共稼ぎどっちも欲と二人連れ 梅里
 この次は何を買おうと共稼ぎ 瓢太
 共稼ぎへんな噂はもみ消され 梅里
 共稼ぎささたばかりによるめかれ 一舟
 子がみんな巣立つてから共稼ぎ 水客
 仲人の嘘と判って共稼ぎ 滋雀
 パチンコも二人並んで共稼ぎ 恭太
 どこに惚れたか二号も稼ぎに出 好郎
 席題「世話好き」 金井文秋選
 結局は選挙目当てのお世話好き 慶太郎
 世話好きが他人に任せ、世性を持ち 珠笑
 口軽いとこが世話好き玉にきつ 清人
 隣から嫌味、噂の加減まで教えに来 瓢太
 世話好きのベッドのなまただいてみ 水京
 仲人のかけもちですと席を立ち 恭太
 玉の汗かいて世話好きやってくる 藤佑
 世話好きでないが酔うたはっつとけす 白溪子
 世話好きなき夫婦にきつるつがなし 水京
 世話好きも坊やのソッコに音をあける 静馬
 遠慮したら世話好きひがみ出し 好郎
 世話好きの夫で妻も気が、疲れ 庸佑
 世話好きをよい事にして甘えに来 清人
 世話好きをいかに世話好き飛んで来る 阿茶

世話好きのおやし家は手をつかね 静馬
 世話好きも自分の事にはあまし 花梢
 世話好きにやっぱりあった下心 水京
 半生の町会長がやめられず 恭太
 世話好きが隣のおかしも、とつかり 一栄
 世話好きが隣のおかしも、とつかり 一栄
 世話好きが別れ話も引き受ける 梅里
 世話好きがまた目撃者として残り 白柳
 無責任なりに世話好き役を持ち 柳太
 あてにせぬ返事を世話好き持つてる かつみ
 世話好きは自腹を切つて不足きき 阿茶
 先生は専門外の世話が好き 主水
 頼まれもせん出戻りを売り歩き 痴亭
 足繁く世話好きがぐる好い話 梅里
 世話好きでないがやらねば誰もせず 白溪子
 席題「残暑」 本多柳志選
 近づいた五輪へ残暑言うとれず 珠笑
 スタミナへ残暑きびしい日が続き 進之助
 扇風機残暑も同じ首を振り 柳太
 売れ残る西瓜に残暑もてあまし 柳太
 衣更女残暑へいどむ柄 かつみ
 残暑に残暑にむいたコマージュアル 庸佑
 堂の中残暑の汗がしむ法衣 句楽坊
 暑中見舞残暑見舞で返しとき 静馬
 水浴びの子供に残暑喜ばれ 珠笑
 残暑なお俺をためして座りこみ 凡太郎
 大阪を離れて残暑の風を知り 白溪子
 裾捌きまでも残暑と言う軽さ 慶太郎
 クーラーの音が残暑を気にかける 天樹
 先生も生徒も残暑きびしいそう 恭太
 熱の子へ残暑きびしい日が続き かつみ
 消印もかすれて残暑という葉書 水京
 ひと雨がはしる残暑へ水を打ち 白溪子
 映画館残暑のクーラーで追い出され 野迷路
 商魂は残暑を餌に売りまくる 痴亭

歯車も残暑の音を持って 水京
 地下鉄の残暑を憩う冷風機 天樹
 残暑まだブルサイドの人だから 清人
 残暑残暑生き残ってる大きな敷 白柳
 残暑なお続け続けとピヤホール 滋雀
 残暑まだ役所の事務がはかどらず 清人
 この家も格が立っている残暑 好郎
 風鈴の紐も千切れて居て残暑 清人
 一階に住んで残暑の窓を閉め 柳志
 川 阿倍野支部句会(大阪市)
 金井文秋報
 表彰台涙が水着をまた濡らし 良
 豊菜に螢もなやむ甘い水 梅里
 下町をさげすむ妻で肩がこり 一舟
 底力出ぬうち宿題覆てしま 静馬
 聴診器丸めて箱とさくらせず 柳志
 腹芸で新聞記者を煙に巻き 文秋
 噛みしめる飯の甘さも回復期 珠笑
 甘い声出して打算の媚を売り 痴亭
 甘いものうす茶のひまへかしこまり 金三
 腹芸が読めずはた目がハラハラし 章雅
 むろ育ち万事世間を甘く見る 双葉
 柿泥棒甘み出るまでよう待たず 静波
 孫にだけ甘さを遺儀なく発揮 凡子
 清算をしたらうぬほれだけ残り 白柳
 底力見せたつもりがまた整理 小松園
 下町の川はよこれて動かない 舟遊
 下町の娘でさわりやわらかい 八郎
 下町で暮して知った人間味 弥生
 腹芸と土性骨とで叩き上げ 阿茶
 腹芸がわをすガムをかんでいる 庸佑
 社長の腹芸秘書までハラハラし 宗義

川雑 玉造支部句会(大阪市)

西出一栄報

向いあつた恥しさコーヒをかきまぜる 宇佐美
困地族スダレの色にある我が家 正彦
座敷の灯消してすだれの風を知り 白柳
線香と脱経がすだれを抜けて出る 良
冷たいもの飲んで寝冷えのせいにする 一栄
子の手前寝冷えしたと言えぬババ 柳宏子
寝冷えした事を笑って老夫婦 千葉
スリップの胸算もある急停車 金蔵
総裁の涙で事故が片付かず 一舟
クリスマス前夜ポーナス飲み歩き 半月
留置場前夜の記憶よみがえり 市郎
前夜祭ほどに本番客が来ず 静馬
参観日前夜を母の苦労性 三時
参考書と首っ引きしてその前夜 清子
前夜から飲んで寝込んだ本まつり 風仙洞
前夜祭吾れ労働者と言う 誇り 六竜子
陶工の指に粘土はねばらない 章雅
金儲けだよと税務署でもねばり 文秋

川雑 ハワイ支部句会(ハワイ)

築山快夢起報

御先祖の出がアフリカで黒光り 快夢起
魅力など言うて居られぬ共移ぎ 同
お互の魅力に引かれ五十年 同
青い目の嫁と先祖の墓の前 同
湯上りの魅力素肌を生々と 同
元士族云々も詮なし移民の子 同
老の目をそしる魅力の曲線美 同
御先祖よ浮かんできれと今日の地位 同
微笑だに浮べぬ顔にある魅力 同
家系図がまだ金になる民主主義 同
陰に香る花の魅力は妻は持ち 同
国を出て先祖に濟まぬ五十年 同

体験の尊い魅力子に譲り 同
祖父の土地主は小作と変つて居 同
湯上りの魅力女の薄化粧 同
御先祖はみんな尊いことにされ 同
肉体美別な魅力にさいなまれ 同
御先祖の位牌火にくべ改宗し 同
古稀すぎて不思議の一つの魅力 同
先祖自慢いかさま系図を買つて来て 同
疲れだけ夜空の旅の魅力なき 同
法曝吹けど墓に先祖の影うすし 同
あの目元すこい魅力に客がつき 同
御先祖も祀らず寺へ喜捨もせず 同
黄金の魅力スパイは国を売る 同
雑婚へ先祖も冥土で嘆くらん 同
姿見へ今日の魅力の眉を引き 同
二言目先祖を言うて嬉し後れ 同
御先祖の過去帳開いて奮発し 同
飾らない魅力で続く夫婦仲 同
御先祖に見せたい移植樹花盛り 同
倦怠期何が魅力で惚れたやら 同
罪なき先祖の墓地にブルドーザ 同
觀光の魅力は招く富士の山 同
先祖の遺訓忘れはしない酒を酌む 同
魅力魅力さき美酒あり女体あり 同
孫よりは乳の丸が魅力なり 同
成し遂げて先祖の中に我を見る 同
悻らざる先祖の遺訓飯化市民 同
ステージの魅力老若区別なし 同
皮下脂肪魅力をそそる肌の艶 同
先祖代々我利我利亡者と言う姿 同
更年期男の魅力の外に居る 同

川雑 京都支部句会(京都市)

田中烏雀報

孤娘なぐめうどんやのとうがらし 幸男
ボーリングを語りうとを激しく喰い 同
時に光のない海底も静かになつた 同
くらげうようよ秋の海の顔 同
薬局に口紅が有りガムが有り 同
俗物の中に灰皿置いてある 同
自分から俗物と言ひ禪坊主 同
尼緑之助報
名月にささえは岩に出て眺め 同
傾いた月へ夜露がころげ落ち 同
貝ある日人間様に羨まれ 同
逢うよりも待つ気切なき夜のデイト 同
待つている学食届かぬ下宿の灯 同
つゆの玉けがあれなきまま陽に溶ける 同
しじみ貝あわれ小さく膳に乗り 同
朝顔の露をはじいて凜と咲き 同
名も決めて待つ安産の御神札 同

川雑 備前支部句会(岡山県)

横山一声報

泡の無いビールを飲んで居る野心 同
ひと泡を吹かせて蔭で手を叩き 同
泡ばかりわしのコップについて呉れ 同
泡盛りのもう一杯はことわられ 同
てんかんが天下御免の泡を吹き 同
水泡になるのに独り者がため 同
割かんのビールの泡を早くうけ 同
うたかたの命をそれぞれ夢があり 同
雨だれの泡大洋の水になり 同
口角へ泡を飛ばした師を憶い 同
泡一つ金魚が追うて静かなり 同
御点前に自慢の泡が立って来ず 同
すき焼きの泡で馬肉とピンと来る 同

女客泡消えかかり飲むビール 同
招待のビールの泡が待ち切れず 同
下戸がつくビールコップは泡ばかり 同
泡のよな俺を頼りに生きている子等 同
よかんをきしてはめてる泡の出来 同
夏めいて五彩を放つ蟹の泡 同
こげついた匂いカーテン押しける 同
カーテンに螢が夏をつげに来る 同
似た声と締めたカーテン細くあけ 同
カーテンがすだれに変わつて夏が来る 同
思い出をカーテンだけが知つて居り 同
カーテンの陰に昼寝を見やぶられ 同

川雑 土佐支部句会(高知市)

川竹松風報

津秋六花報
淑やかに簾の奥で着更える娘 同
青すだれ午睡の寝そろうが気がかり 同
古すだれへチマの日除になつて果て 同
虫の音にすだれの色もあせて来る 同
妾宅のすだれの色が旦那待ち 同
建て混んでプライベイトへ要る簾 同
未亡人すだれきれいにかけて住み 同
風鈴がすだれのうちに涼を入れ 同
涼風を簾に受けて飲むビール 同
涼を呼ぶ簾のうちのさし向い 同
すだれから芸妓屋らしき香が溢れ 同
すだれ越しに見る見えぬ又もつれ 同
簾越しにセイルスマンは断られ 同
簾から中は見せたくない暮し 同
すだれ越し女は女を意識する 同
残業の母にすまない口返事 同
期待した返事がそれた日の孤独 同
長引いた返事良縁取り逃がし 同

不愛想な返事は妻の抵抗か 博理
 借りた日は忘れた腹の立つ返事 寛
 返事さえくれない人をまだ想い 百日紅
 先生も飲めばだらしのない姿 窓花
 先生に先生がいて面白い 蛇
 女教師のみだら父兄の目にあまり 紅雨
 この酒も空盛をうめるには足らず 大破
 朱に染まぬ男でいまだ出世せず 俊一郎
 ポーナスの記事へすまなく病んでいる 羅春
 土佐人に酒の話題が多すぎる 松風
 駅前で女外見もなく走り 山里
 クラス会夫婦で来るエピソード

大阪通信病院川柳会 (大阪市)

森下愛論報

松葉杖馴れてテンボの早い脚 夏生
 松葉杖石切さんへ捨てに行き 愛論
 松葉杖になつても生命をよるこはれ 宏子
 抜け出してまた呑んでいる松葉杖 幸男
 露路裏の広場で踊る盆の夜 春雄
 豊作へ一きわはずむ盆踊り 没食子
 盆踊りゆかた姿のお嬢さん 勝
 盆踊り紅提灯も浮かれ出し 福士太郎
 オリジナルピクあれよあれよ道がつき 草右

南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水報

救急車家でないから出て見ると 句念坊
 救急車のサイレンアベック知らぬ顔 和郎
 救急車からお隣りものを言い 宏子
 救急車産婦を乗せてあわており 貴山
 救急車寝巻の上に白衣着る 烏莊
 稼ぎ手が墜ちた話の救急車 路郎

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太郎

夏祭り去年の祇園思い出し 林松

夏祭り花火線香へよってくる 幸論
 昔をば偲び楽しい夏祭り ふみ子
 札幌にて
 夏祭り熊は出ぬかとパトロール 半月
 夏祭りおみこっさんも車で来 摩天郎
 夏祭りに見染め今では式も済み 一義
 夏祭り小遣いせびる子もおらず 八重子
 夏祭りはだか同士の酒になり 白柳
 水足りて出来よし村の夏祭り 東雲楼
 入墨の竜も酔ってる夏祭り 紅月
 その中に拘りも交つて夏祭り 八郎
 夏祭り巫子もヘップバーンで舞い 静林庵
 従来短気八十路もこすつもり 重子
 むかつ腹おさまるゴビかきまわし 美代
 カナリヤも知っていました日の短気 花梢
 吹きあいて短気は尺八振り上げる 貴山
 ほろ口は赤信号も目につかず 栄一郎
 赤信号無理にわたつて息を入れ 美房
 事故現場赤いサンダル目に痛し すみれ
 事故現場花東雨にゆれている 青米
 スリップの後を遺族ものぞきこ 柳太
 吾が家今日事を過ぎ灯がゆらぐ 六童子
 からくりと見破る美女の眼の魅力 きはち
 からくりも見抜く鋭い刑事の瞳 都詩子
 伊賀甲賀からくり鏡うている忍若 太路

諫早川柳会 (諫早市)

川岡靈眼子報

論争の後にこぶしが待っていた 蘇範
 論争に勝って心に残る悔い 卓二
 原水禁論争の果に分裂し 筆染
 論争は笑いとばして阿呆が勝ち 夢天
 論争に時には人の氣も知れて 随心
 スネを敷に喰れて論争まだ続き 重信
 霧困気に酔い論争も熱が入り 重幸
 論争も敵と味方のうしろ楯 万象
 舟を避けて早松めに帰る知慧 万金

論争を時の氏神よく纏め 筆染
 論争はしきり喧嘩は出来ぬ仲 重信
 論争も師の仲裁でひと休み 万象
 論争の主役が仲裁押しなだめ 靈眼子
 腹の虫置場所を替え笑い合ひ 同

あすなる川柳会 (大阪市)

山本素郎報

だしぬけにやるだろうソ連月を見る 弓彦
 園芸が精一杯と袖杞を飲み 百酒
 長い髪洗ひ女神のように立ち 恵美子
 小道から小道へ歩く二人づれ 水邦
 姑にまずゆかたから教えられ 福郎
 だしぬけに焼香順がまわつて来 ゆきを
 女神とも思え妖婦とも思え 素郎
 プラカード小道へそめて風を入れ 梅里

コクヨ川柳会 (大阪市)

川口理休報

帳尻を合わすつもり合わんはず 河童
 引出しに世帯やつれのおいみつ 武
 引出しで蟬の子飼つて少年期 武
 引出しのあけしめ毎に博文消え 武
 引出しに名こりを残し嫁ぎゆき 広彦
 B G の引出一円の山一 生
 蟻地獄やつと気付いた老官吏 ルミ
 ありがたやありがたやとて蟻たかり 武
 蟻一匹まごいて夏の日は落ちる ほとる
 定年の手前で坂は急になる 武
 坂道が続いて葡萄の村に入り ルミ
 あれしきの坂道なぞと御老休 休

城北明老会 (大阪市)

田中風柳報

炎天下美化協力の婦人団 久子
 のびすぎた朝顔へを越して咲き 富士
 お上品と言われゴルフに足運び 風柳

サンガラスいきな姿もこき見え 芳
 台風あとの静けさ孫飯り 繁
 盆踊り疲れも見せず泥化粧 頼
 盆が来てお墓の掃も涼しそう 一登
 仁術と貸したら医療費持つて来ず 弘村
 気の早い嫁の気持に感謝する 清源
 膝はたけ涼風さそうベンチの娘 誠
 夜すすみに新妻化粧見せに出る 誠

日ノ丸句会 (鳥取市)

河村日満報

キャラバンで国の情緒をたのめさせ 蒼水
 役得の盃特級所望され 達男
 宣伝カー風船だけをおいて去り 同
 十年の月日役得ぶとりする 三恵子
 年頃の娘があるを宣伝し 同
 お中元役得の差をしみじみと 多加子
 売り出しの宣伝空につづぬける 同
 役得があつて世話役張切らせ 道子
 P R はどの名医でないか知り 同
 役得の味一級酒特級酒 芳道
 オーバーな宣伝鼻であしらわれ 同
 会計という役得でもなくて 日満
 宣伝の料理おしげもなく使ひ 同
 お隣りの役得妻にうらやまれ 多可志
 宣伝にのつて家内にしかられる 同

宴会・出張パーティ・折詰弁当
 梅里ノ店
大萬
 料亭 阿倍野区松崎町三ノ一〇
 TEL (六三) 三九三五番
 (六三) 七七八二番
 館の店 アベノ橋近鉄地下食通街
 TEL (六三) 〇一四七番
 串の店 南区豊屋町三ツ寺センター
 TEL (三三) 九一八四番

室樽柳

生 郎 路



★台風で、あつちこつちに被害があつたが、みなさんはいかがでした。一々お見舞も出来なかつたので誌上からお伺いいたします。私の方を見舞つてくださつた方もありますが、拙宅は少し大阪でも高台の方に属するので、水の心配はないし、角家なので風当りはきついのですが、今回どうにか無事でした。ご放念下さい。★朝夕はもう肌寒を感じます。お風邪を召さぬように。私などは重ね着をした上に九月の二十四日から、電気座布団に親しんでおります。数日前までは喫茶店などでも冷房をしていたので私はおそれをなしたものです。★川傍柳初篇研究でお世話をかけている岡田さんが九月二十三日に京都まで所用で

南下されたそうですが忙がしいので今回は寄れないから、ことわつておいてくれと、啞三味さんまで出発前に電話があつたそうです。秋の夜の一時時でも、秋談したいと待つていました。又の機会を待つより仕方ありません。お互いに忙しいのだから。★義宮さんと華子さんが古式で賢所へはいられるお姿を新聞で見ても、古式もいなど思つた。庶民も、費用の出せる人達ほどは古式によつてもいいのではないかと思う。頭にはエゴシをいただくほどの古式でなくとも慰斗目の上下に威儀を正して着座すれば、身のひきしまる思いがするかも知れない。川柳なども、徒らに背広式やステテコ式な川柳を

でないという凝りかたまり屋でないだけで、私は川柳に生推のものは来たが、他ものかよき眼に這入らなほに、川柳を盲愛してはいないつもり。★シカゴの「本田露角君が、「川柳し

かご」を根気よく出し見ているが、この雑話を見るたびに思わされるのは、この雑話も一世の人たちが亡くなつたり、手をひいたりすると、いつまで続け得るかを思わせられる。雑話のいい悪いは別として、それは淋しいことである。露角君とは静岡の川柳大会へ来日されたので、一面諷があるから、よい諷があることが思はれるのである。剣花坊が亡くなつた時に、頼まれれば多少の力は貸してあげようと思つたが、信子さんを押しつけて「川柳人」をやつてゆこうと、短歌でも俳句でも秀れたものはいない、新劇でも、歌舞伎でもないものはいないと言われている。歌舞伎でなければ芝居

★九月七日の川柳忌に際し、恒例により本社の新選者として左記の諸氏を推薦した。

新選者を推薦

辻 白溪子氏
辻 圭水氏
西出 一栄氏

社の黒板

ていられたが、昔の剣花坊時代を知るものにとつては一種の寂しさを感ぜずにはいられない。★私がこんなことを言うのも、私の主宰している「川柳雑話」も、私が亡くなればどうなるか判らぬ。これは川柳界にとつて大きな損失だと思つた。栄枯盛衰だと言えはそれまでだが、あとでやれるように経営をして来たが、それが反つて仇となるかも知れない。勿論諷刺は引きつがな言つてはいる。たとえ名義だけでも、イヤだとハッキリ言つてはいる。★近ごろ古い柳人が亡くなつて、私のような生き残りの、柳界を支えてゆくには、柳界はあまりにも多事であることを思うからである。医者の息子か必ずしも医者にならず歌手になる世帯では、非営利的な柳界で生き抜こうというあつたつぎがぬかるといつてたげが当らない。ただ一つ私の望みは、若い人たちの養成だが、それも木によつて魚を求めよう。★私はこの号が出る頃には熊本・諏訪早・長崎方面の旅にいろいろ。

★川柳支部十月旬会
明和研究会・18日(日)
一時、題、高・長・早、所、阪神電車鳴尾

★阿倍野支部旬会・20日(火)午後六時、題、世界・スポーツ・国旗・参加、所、阿倍野区松崎町三ノ一〇割京大萬★京都支部旬会・16日(金)夕、題、彫刻・寡婦・投書、所、四条繩手仲源寺

★富柳旬会・11日(日)一時、題、アルバイト・お世辞・老らく、所、富田林市毛人谷、藤岡花栢居、

最も美しいこと
最も近代的なこと
最もご便利なこと

ハンシンは
皆様の百貨店です

大阪南二百米鳴尾公民館、★南海電鉄旬会、15日(木)六時、題、優勝・役得・声、所、難波高架親和クラブ、★いがみ旬会・2日(金)七時、題、急所、信順・気軽・本場・安静、所、池田古心居、★王道支部・10日(土)午後六時半、題、信用・村、つなぐ、所、市電玉造南一〇〇米、大阪信用金庫

★阿倍野支部旬会・20日(火)午後六時、題、世界・スポーツ・国旗・参加、所、阿倍野区松崎町三ノ一〇割京大萬★京都支部旬会・16日(金)夕、題、彫刻・寡婦・投書、所、四条繩手仲源寺

★富柳旬会・11日(日)一時、題、アルバイト・お世辞・老らく、所、富田林市毛人谷、藤岡花栢居、

川柳 婦人友の会
十週年記念旬会
日時 11月15日(日)一時
会場 天王寺区幸相山町一四二西出一栄居

兼題 「十」 腹乃選
「PTA」 阿茶選
「ひとり」 操子選
「読書」 良子選
「我まま」 きこ子選
「宝石」 一栄選

出席者も兼題全部各題句箋別・裏面に雅号明記・十一月五日までに投句のこと
席題 当日一題発表
会費 五百円(食費共)
★投句だけの方は五十円封入のこと
投句先
大阪市南区二ツ井戸三三 山川阿茶宛
電話二二一四四三



高単位綜合消化酵素剤

ビフテン

30錠・100錠・1000錠

大阪・道修町
森下製薬

麻生路郎先生著

川柳とは何か

価 二五〇円
送費 七〇円

―川柳の作り方と味わい方―

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽――そうしたもろもろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的である。その川柳がいかんして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は――以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区払方町27 振替東京29507

麻生路郎著

好評噴々

新川柳鑑賞

川柳の味わい方・五百数十句

価 二五〇円
送費 八〇円
B 6 版
二五〇余頁

(毎日新聞評)

麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳はもう六十余年にもなる。

この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にして他の雑誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとした

ものである。句の方より夾はその鑑賞文の方がなかなかうがっていて、一気に読ませる魅力がある。

発行所 川柳雑誌社

大阪市住吉区西成内方代五丁目二五番地
電話大阪(677)1(六八)一
振替口座 大阪 七五〇五〇

募 集

課題吟募集

- 独学 千句以内 大西八歩選
- 身持ち 千句以内 八木摩太郎選
- おしやち 千句以内 小浜牧人選
- 大 千句以内 天津柳慶選
- 家 千句以内 橋高薫風子選
- 拾い 千句以内 辻白溪子選

毎号募集

- 近作柳梅 (後身十句以内) 麻生路郎選
- 人生 千句以内 北川春葉選
- 川柳塔 (後身十句以内) 河野春三選
- 文章 (評論・研究・感想其他) 麻生路郎選

投稿規定

- ▽ 投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
- ▽ 「近作柳梅」は一般作家の雑吟を募る。
- ▽ 「課題吟」「人生譜」は誰でも投句が出来る。
- ▽ 「川柳塔」の投句は不朽洞会員に限る。

日列5号 毎月一回一日発行
川柳雑誌 三十九年 第十号

定価 一一〇円 (送料六円)

(茶転載) 半力年 七五六円(千) 巻
一力年一、四四〇円(千) 社典組
昭和三十九年九月廿五日印刷
昭和三十九年十月一日発行

発行所 川柳雑誌社
大阪市住吉区西成内方代五丁目二五番地
行司取人 麻生幸二郎

電話大阪(677)1(六八)一
振替口座 大阪 七五〇五〇

Printed in Japan

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
昭和廿九年十月一日発行 (毎月一回一日発行)

編集 兼 発行印刷人

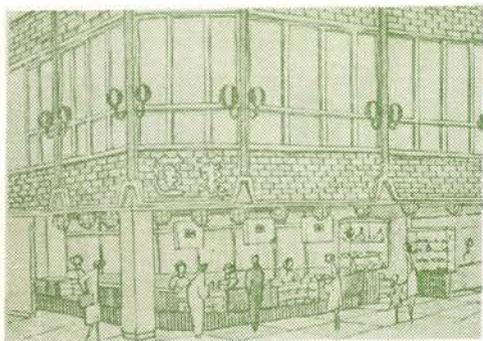
原生堂印刷所 発行所

川柳雑誌社

大阪市住吉区西五丁目二番五号 電話大阪(671)六〇八一

振替口座大阪七五〇五〇番 定価百二十円 (送料六円)

豚饅・焼売



広東料理

蓬萊

大阪 なんば

TEL (641) 0551 ~ 2

高島屋店・そごう店・天満京阪ストアー店

プラス
+保温式



ザンヨー

ホットママ

EC-22型
現金 43,00円
正価

SANYO
三洋電機株式会社



大和文華館

日本建築の特色に近代美をいかした建物で絵画・彫刻・書蹟・陶磁漆工・染織など 国宝や重要文化財をふくむ逸品を集めた すばらしい美術館です

春秋には 特別展覧が開かれます
近鉄上本町から奈良ゆき急行28分
京都から奈良ゆき特急30分 西大寺駅のりかえ5分 学園前駅すぐ



あなたの句帖が再版
されました

★路郎好みだけに、すばらしく気がきいて
います。句会でお使いになるなり、抜けた句
の整理にお使いになれば、何冊かで、あなた
の句集の礎稿が出来ます。又柳友への贈答に
句会の賞品にも最適です。是非ご利用下さい

一冊八〇円(送料二〇円)

大阪市住吉区西五丁目二五

発行所 川柳雑誌社

電話 大阪 6081

振替口座 大阪七五〇五〇